



次 目

年頭の辭	記
日蓮聖人を憶ふ	本多
本經祖書要文講義	本多
婦人の覺悟	丹羽
遠慮なき皇道大本教の批判	記
醒めたる協力	兒玉
華府國際會議に就て	廣瀬
内在と超越存在	川島
何を頼むべきか	本多
記事報道十數件	日生

號月一年六廿第

年頭の辭

華府會議に於て四國協商成り、軍備縮少の事議せらるゝと雖も、思想の問題は一層の重要を加ふるの時、而して内人心の不安と動搖と日に加はるの折、吾人聖日蓮の門弟子は如何の覺悟を以て大正第十一年を迎ふべき。

聖日蓮の時も頗る今の時局と相似たるものありき、承久の亂によりて國體の大義は覆れり、長き戦亂の後をうけて人は深き憂愁と悲哀に包まれたり、何に依つてか外我國礎を脅かせる大蒙古の襲來に當るべき。聖日蓮は法華經を提げて起り、不惜身命の誓と、師子王の心をもて、立正安國の大事を執權北條以下日本國中の人々に訓へたり、迫害も法難も巖に碎くる潮の如かりき。

今の時、某國は軍事の施設に於て我國を包圍せり、經濟の競争に於て我は尙幼兒の如し、過去に幾度か國難に我國を支へし國民精神は今如何の狀にある、祖宗三千年來鍛ひに鍛ひし大和魂は今何處に在せる。我國民精神を毒すべく某國は多

額の宣傳費を投ぜりと云ふに非らずや。國民奮起の秋は正に今にあり矣。

我等日本人の誇りは最後の一人に至る迄祖宗の國家を擁護すべく、絶對の努力を致すにあり、骨砕くれば碎けよ、肉爛るれば爛れよ、如何ならん事に遭ひてもたはまぬは我敷島の大和魂なり。又聖日蓮の畢生の誓は教によりて日本國の柱とならんとするにあり、龍口の白刃も、佐渡の白雪も其の志を奪ふ能はざりき。

吾人統一團同人は茲に大正十一年の初頭に當りて天下に宣す。若し思想を以て我國礎を脅威する者あらんに、我は聖日蓮の誓と、祖宗三千年の氣魄を以て起たん、暴力も、煽動も、脅威も、恰も猪の金山を磨するが如けん矣、

南無妙法蓮華經



時

言

日蓮聖人を慕ふ

本 多 日 生

本日は統一團のお會式であります、これは例年十一月二十日と定まつて居るのであります。屢々申しましたが新曆の方から算へますれば毎年十一月の二十日が日蓮聖人のお會式の當日なのであります。新曆にして十月十三日と申すのは、それは氣候も違ひますし、日蓮聖人當時の太陰曆から考へますと、丸て違ふことになるのであります、そこでこの新曆と申すのは、日蓮聖人がお薨れになつた時にこの曆が行はれて居たものとして、それをスツカリ研究しまして、その當時のお薨れの日を起算致しますと、この太陽曆の十一月二十日がキツナリそれに當るのであります、これは永久に十一月二十日がほんとうのお會式の日であります。他の日に行うて居るのは皆間に合はせないのでありますから、その事を御了承置きを願ひたいのであります。關西地方では皆十一月の二十日でありませう、お會式には柚子が能く熟れなければならぬと昔から言うて居りますが、新曆の十月十三日では柚子はまだ熟れないのであります。

今日はお會式の事でありませうから、日蓮聖人に關して特に申し上げたいと思ふので、日蓮聖人を慕ふと題して置きました。お互ひ日蓮聖人を信じて居ります者共には、日蓮聖人を敬ひ且つ慕ふといふことは今更申すまでもない事でありませうけれども、殊に今日の日本に取つて、現在の状態に於て、一段と日蓮聖人を想ひ起すことが多いからしてこの題を掲げた次第であります。

一、思想戦の勇將

それはどういふ點に於て特に日蓮聖人を思ふかと申しませう、是は私の考であります。第一には思想戦の勇將として日蓮聖人を思ふと言ひたいのであります。今日の日本の思想界の状態はこのまゝに打棄て、置いてはならないと云ふとは誰も考へて居る事でありませう、一方にはだんだん悪い思想の宣傳もありませうし、又いろいろ思想が分裂して參つたのであります。動搖も起つて居るのであります。それ故にこれをこのまゝ打棄て、置きませうならば、この日本人の思想は必ず過を取ると云はねばならぬのであります。然らばどうすれば宜いかといへば、これは正しい思想を飽くまでも宣傳して、悪い思想を撲滅することに努力しなければならぬのであります。て正しい思想の人は澤山ありますけれども、それと戦ふ所の努力、又その戦ふ勇氣を持たない人が多いと思ふのであります。傍觀の態度に居る人が尠からずあるのである。それで思想の戦が始まつて居る時に、悪い方は熱を持つて居つて一生懸命にやらうとする、正しい方は傍觀の態度に居るといふことになれば、どうしても正しい思想がだんだんに打破されると云ふことに相成るのであります。それ故に思想の戦に勇ましく進撃をする、正しい方から出て、さうして勇往邁進す

る所の勇氣が今日日本に於ては確かに缺けて居るのであります。これを學界に見ましても、實業界に見ましても、思想界の前途に於て正しい思想の戦闘に勇往邁進する所の理性的の感情が缺けて居るやうに思ふのであります。今の日本に日蓮聖人のやうな方がおてまじになつて、勇ましくこの思想の戦に進撃の命令を發して下さつたならば、誠に有難い事と思ふのであります。がそれは今望んで得られない事でありませう。それ故、大勢の日蓮門下が協力致しまして、さうして生ける日蓮の如くに今の日本に於て働きを續けて行かなければならぬと思ふのであります。それには唯だ漠然として日蓮を崇拜して居るのは役に立たぬと思ひます。日蓮聖人は偉い人ぢや、有難い人ぢやと唯だ崇拜するのみではその力が出ませぬから、日蓮聖人を思想戦の勇將として崇拜し、その勇將は今や涅槃せられたから、そのお示しになつた聖訓を命令書と心得て、お互ひ協心戮力して思想戦の巷に進軍の喇叭を吹いて行かなければならぬと思ふ。その決心なしにお會式を營んだのは日蓮聖人の御恩報じにはなるまい、日蓮聖人の御魂がこゝにお出ましになつて居つたならば、唯だ大勢寄つて有難いといふだけの崇拜的信仰ならば、日蓮聖人は御満足なさらぬであらう。どうか日蓮は命を賭けて戦つた、この思想の正邪の戦ひに進撃をして呉れよ、日蓮が汝等に與へた遺訓は「若黨共二陳三陳つづいて迦葉阿難にも勝れ、天台、傳教にもこえよかし」と言ひ置いたのであるがこれは忘れたのであるかと仰しやるであらうと思ふのであります。お互ひはどうぞその思想戦の勇將としての日蓮聖人を想ひ起して、その思召しに適ふやうな働きを倍々盛んに致したいと、今日この御會式を營むに就て感殊に深い次第であります。

二、教の權威を示す

第二に考ふべき事柄は教の權威を示す上より日蓮聖人を慕ひする考が深いと思ふのであります。教の權威を示すと申しますれば、今日は人々が非常に慢心をしたと申しますか、妙法所に自尊心が發達をしまして、さうして教といふものを侮辱することが盛んになつて參つたのであります。これは確かに履き違へた觀念でありませうが、自分の人格を尊重するのは宜しいけれども、教に對してこれを侮蔑すると云ふことは非常に惡い事でありませう。昔の歴史から考へると、人格の高い人ほど教を大切にしたりやうに思ふのであり、人格の低い人間は教を侮辱して、我儘勝手な事をやつたやうに思ふのである。夫て現代の人は人格を重んずるといふて教を侮辱するのは、これは劣等な人の型を學んで居るやうに思はれる。その點に於ていろいろの間違が起つて來るのである、自分の考を先きに振り立てるが爲に、而もそれが低い考であり、腐れた考であつたりする事故に、所謂その誤つた事柄が世に起つて來るのである。人間は貴いものには違ひないけれども、これを教に依つて導かなかつたならばどうしても誤りを取るものであらうと思ふ、日蓮聖人と雖も、教を離れてしまつたならば決して立派な人には成れなかつたであらう、聖徳太子でも、楠正成でも、乃木將軍でも、誰でも立派な人といふのは教をよく學んで、その教に適ふやうに思想及行動を執つたから立派な人になつたのであらう、教なくして人が出來たといふことは殆ど無い譯であります、それは「生知安行」といふやうな言葉があります。或は「無師知」といふて師匠なくして知る、「生知安行」は自ら進んで大道を悟つて、教と同じ教の本を悟つて、さうしてそれに服從して行く所の人である、無師知と

いふのは師匠の手を借らないでもやはり同じ所の貴い道を發見する所の人でありまして、現代人のやうなその時々の一時の考、十分に練れてない考を押立て、俺はどうもさういふ事は氣に入らぬとか、俺は斯うやつても宜いと思ふとかいふやうな粗末な考を振り立てた者は古來一人もない。釋迦如來が無師知といふことを言はれたのは、それは非常な研究と鍛錬を経て所謂無上正覺を成就遊ばされて、そこには三世諸佛一貫の大道を悟り、三千年後の今日動きのないやうな大きな教を立てたんぢやから、それは釋迦様位な大人物であつて、而もあのやうな難行苦行を経て、端坐正覺を成就したやうな人が出て來たなら、教に依らぬでも俺の考でちよつと聞いて呉れと言つても宜いけれども、今の人間のやうなバイ／＼がさういふやうなことを言つても一寸も有難いことはない。そこでどうしても今の弊害を救ふには教の權威を復活しなければならぬ。現代思想の傾きはすべて教を侮辱して居ります、大體教といふやうな言葉さへも最早用ひない、それは舊いと云ふ、もつと決まつて居るものは皆舊いと云ふ、新しいといふものは確にまだ試験の済んで居ない、ちよつと今朝考へた、或は少し前電車の中で組立てたといふものが新しいと云ふことになるのである。新しいと云ふことは教を侮辱する所の言葉としてこれが盛んに用ゐられて行くのであります、恐るべき言葉であります。所が日蓮聖人は教の權威を示すこと頗る嚴格な方であつて、聖人はあれだけの立派な人であるけれども「手に經卷を握らざれば用ゐじ」と申します。たとへ等覺の菩薩たりと云へども手に經卷を握らざれば用ゐじ」と日蓮聖人は開目鈔の中に言はれて居る、等覺の菩薩といふのは佛様の悟りに近い位な菩薩と云ふのであります、菩薩に四十二段の階級が立てられて居る、中の四十四段まで登つた、もう一段登れば佛と同じものといふのを等覺と申すのである、月の光りに譬へれば十四

夜の月の如く、もう一日にして満月に達するといふ程な菩薩を等覺の菩薩といふ、その等覺の菩薩が話す時でも、手に佛様の説かれたお經を握つて、お經に當嵌めて語るものでなければ用ゐるに足らぬと日蓮聖人は言はれて居るのである。況んやその菩薩にならないバイ、が出鱈目ばかり言ふたつて、それは當にもならぬといふことはこれは無論である、今の學者は新を追ふが爲に生煮えな間違ひだらけなものを吹聴するといふことは、輕卒とも暗愚とも批評の限りではない。それは自分が一人て今考へて居る位な事は宜いけれども、生煮えなことを遠慮會釋もなく社會に公表するといふことは不謹慎とも馬鹿とも言ひ様の無いものである。併しそれが通り相場になる、通り相場になれば間違つたものでもえらいことになる、無理が通れば道理が引込むと云ふ、無理が行列してゾロ／＼進んで行けば道理が横路の方に逃げてしまふ譯であるから、生煮えが行列を始めたものだから教といふものゝ權威が地に墜ちることになつた。日蓮聖人は「法は重し身は輕し、身を殺して法を弘める」というて、人間の生命よりも重いものが教である、「人うちはり憎むとも法重ければ弘まるべし」たとへ如何に反對があらうが、日蓮を流誦したり首を斬ると云つても日蓮の弘める教が正しかつたならば必ずこれは弘まるに相違はない、「人うちはり憎むとも法重ければ弘まるべし」、法と教といふことを重んじて、國が大切だといふても正しき法を立て、國を安らかにしなければならぬ、即ち立正安國である、國を思ふというても法を明かにして思はぬとスカタン^{スカタン}の愛國心が出て來るから、法を知り國を思ふといふ事てなければその愛國心は駄目だと論じたのが日蓮である、實にどうも教の權威を説くこと至れり盡せりである。たとへ喚き頭べを今刻ねられても——龍の口に於て言つたのは、「くささ頭べを法華經にさゝげて金色の如來となるは砂を以て黄金に代ふるが如し」と言ふたので、この命を

法華經に奉るといふ、法に生命を捧げるといふことを言ふたのである。随分、教に盡す人もあり、古來學者が教を尊んだ譯であるけれども、教と心中をする、所謂殉教の聖者として、教に一點も傷をつけない、この法華經を御覽になれば分りますが、大勢の菩薩がわれも／＼と法華經を讀つて貰ひたいと願つたのをお釋迦様はお前たちに譲ることは出來ない、何故かといへば若しもこれを弘めるとなれば随分迫害が強いその爲めに法に傷を一點でもつけることがあつたならば大變な事じやから、お前達に與へることは出來ない、どんな事が起つても法に一點の傷をもつけない菩薩がある、それを本化の菩薩といふのであります、それを呼び出してそれに法華經を託すると釋尊が言はれた。それ故に日蓮聖人はあの通りに首の座に坐り流し者に遭つても、どんな難關に立つても、日蓮聖人の決心は決してこの法には傷をつけない、どのやうな困難が起らうとも、自分の身體をば木の葉微塵にされても、一點も法華經に傷をつけ申すまいといふのが日蓮聖人の覺悟である、そこが實に鮮やかである。三大秘法鈔にあります通り、「靈鷲山の事承に芥爾計りの相違なき色も替らぬ審量品の事の三大事なり」、お釋迦様から與へられたる法華經の眞實の教をそのまゝ芥子の相違もなく、お釋迦様から與へられた法華經を日蓮が教へる教へ方には芥子ほどの小さな違ひ目もない、そのまゝ生きて居る所の色も變らぬ、一點も法華經に傷をつけない、その純粹さを釋尊に見出されて、日蓮は命を賭け守つて此處に來て居るのぢや、靈鷲山の事承に芥爾計りの相違もなき色もかはらぬ審量品の事の三大事なり」と日蓮聖人は言はれたのであります。

斯様に日蓮聖人の教の權威をお示しになつたことを考へて、現代の病弊に對照致しますると、日蓮聖人のやうな方があつて教は重いぞ、何が大事というても教より大事なものは無いぞ、死ぬよりも教は大事ぢ

やど、名譽よりも教は大事ぢやど、木っ葉な理窟よりは古來傳つて居る大事の教を守らなければならぬぞ學者の生煮えな議論よりも教が重いぞ、唯だ形式にいふ國といふ事よりも教は重いぞ、汝の命よりも教は重いぞ、汝の女房よりも、汝の親よりも教は重いぞと日蓮聖人は教へたのである。その通りである、最後の最後まで守り、最後の最後まで維持しなければならぬものは教である、最後の息を引取る刹那まで心に離れないやうにすべきものは教である。とは日蓮が極力教へた事であつて、又自分は事實首がボンと飛ぶ此處まで行つて武士が刀を抜き放つた際に、「これ程の喜びを笑へかし、臭さかふべを法華經に捧げて金色の如來となるか」と申し、法華經が首よりも貴いといふことを申して居られるのであります。或は多少曠劫にしたしみし妻子には心とはなれしか、法華經の爲にはなれしか、いつも同じ別れるべし」女房が可愛い、子供が可愛いといふことは、それは尤もな事であるけれども、なんぼ離れともないと思つても人間の無常の生命がいつかはこれを引割いてしまふ所のものである、泣きの涙で人間は死んで行く、呼べども答へず、叫べども答へざる所の靈となつてしまふ、この事をいくたび繰返したと思ふ、多少曠劫といふ限りなく生れ替り死に替りする時に、百遍、千遍、一萬遍、一億萬遍同じことを繰返し、いつも同じ事をやるのではないか、ほんたうに精神の修養が積んで、法華經の爲に、教の爲に、この別れともない妻子と別れて殉教の節を守つた事があるか、一遍でも法華經の御爲に盡した事があつたならば、今日まで迷うては居らぬ筈であるがどうぢやと開目鈔の中に書かれた、この教を重んずる精神は如何にも徹底して居る譯であります。それ故に日蓮主義の一番の願ひ事は他の事ではありませぬ、何處までもこの廣宣流布を祈つて、一天四海皆歸妙法、法華經を思想の中心に置いて、これを守り立て、この法華經さへ盛んに

なればこれに依つて人々が教はれ、これに依つて國は淨められ、これに依つて人類に眞の平和が來り、これに依つて佛様の世界が人間の世界に影を宿して來る所のものである、この教が一たび地に墜ちた時に於ては、人は教はれず國は亂れてしまふ、教なくんばあるべからず、唯だ教あるのみ、法は體なり國は影なり、體曲れば影斜めなり、法を明かにせずしては人も國も文明も何もないとまで論じたのが日蓮であります。而してその教が左様に重んずる教であります事故に、間に合はせのものではない、淺薄のものではない、釋尊の教の中の最後の教は法華經を取る、その法華經も表面から取らなくて法華經の精髓を提げてさうして日本國の爲め、一切衆生の爲めに法華經を宣傳したのであります。このやうに教を十分に吟味して、さうしてその教に生命を打込む所の偉人が今日の日本にはありたいものぢやと思ふので、この場合に日蓮を慕ふと私は申したいのであります。

三、人心の頽廢不安を救ふ

第三に考ふべき事は人心の頽廢不安を救ふ上より日蓮聖人を慕ふと申したいのであります。今の人々の心は大體に於て頽廢と不安の二つに掩はれて居るのであります、その頽廢は物質的欲望が盛んになつた事より起る譯でありませうが、見渡す限り滔々として人心が腐敗墮落を始めて參りました、年寄も相當に精神は頽廢して居るでありませうが、若い者の方も亦負けず劣らずそれに敗を取らぬ程に頽廢をして居るのであります、禿げた頭も頽廢して居りますれば、若い方の者も頽廢をして居るのであります、之は上下老若を擧げて今は人心の頽廢の時であると思ひます、誰が悪い彼が悪いというて、最早や部分を論ずること

の出来ない程、あらゆる方面に腐りが行亘つたのであります、手が腐つて居るとか、耳が腐つて居るとか云ふのはありませぬ、これはもう全身が腐敗を始めて参つたので、癩病患者の最早足の方にも膿が出かゝり、鼻からも膿が出かゝり、頭からも膿が出かゝり、脊中からも膿が出かゝるといふ風に、日本の人心といふものは腐敗の極であらうと思ひます。斯様に人心が頹廢したのは一通りの議論や理窟では癒りません、これが一寸した腫物であるならば角力膏を貼つて膿を吸ひ出したら一週間もしたら癒るといふことでもありますけれども、全身の血が濁つて現はれて來るところの腫物でありますれば、角力膏では癒りません、どうしても根本からこの人心を救ふ所の方法を考へなければならぬ。もう一つは不安であります、色々の點から不安が襲うて來て居ります、財産を持つて居る者も、社會の變動に依つて富豪を呪ふ聲が盛んになつて参ります、特權階級を呪ふ聲が盛んになつて参りましたから、身分の高い者も富める者も今日は確かに不安があつて、既にその著るしい現象が現れて、富豪を暗殺する者も出來て居る次第であります、顯官を暗殺するものも出來て居るのであります。而して又貧しい者 権力を持たない者の方も安全かといふと、これもどうも經濟界の變動に伴ふて物價は高いし、だんだん不景氣の風が吹いて來るから、この前途はどうなるかといふ不安があります。又その他に於て様々なる人心の不安が起つて來て居ります。それ故に一層頹廢が起つて來るのである、不安と頹廢といふものはこれは因果の關係を持つのであります。そして、人心が頹廢して居るから不安になるのである、不安があるが故に頹廢するのであります、崇高なる信念がそこになく、理想がなく、ボンヤリ人生を暮して甘い夢を見て居りますから、それが爲に不安といふものが起つて來るのである。これを救ふにはどうしたら宜しいか、それはいろいろ方法があります

せう、あらゆる協力を要する事でありませう、政治の方からの改革もありませう、教育の方からも、社會政策の方からも、國民自ら治めるといふ事もありませうけれども、望んでもそれは容易に得難い事でありませう、唯だ今日斯くの如く頹廢し不安に襲はれたものを救ふには、偉人が出て、日蓮の如き偉人が出て、さうしてこれを導いて下さつたならば一番早いのである。この腐りを止める者は學者にあらず、政治家にあらず、金持でもない、所謂傑出せる所の佛の使の如き日蓮が出て、さうしてこの人心の頹廢を喚止め、不安を救ふといふことが一番宜いのである。必ず斯ういふ時代にはさういふ人がお出ましになるのでありませうけれども、未だその人を見當らないのであるからして、その人が出られるまではお互ひに日蓮の門下が協力して、この人心の頹廢、並に不安、これを救ふ爲に奮闘をしなければならぬと思ふのであります。日蓮宗は非常に理想的宗教であり、非常な意味ある所の團體でありまして、唯だお有難い連中が集つて居るとかいふやうな一般の宗教團體とは違ふと思ふのであります、同じ宗教と申しても、小さい目的で起つて居る人もあります、例へば天理教が起つたとか、黒住教が起つたとかいふものは、その根本の理想は何處にあつたかといふならば、極く小さな事でありませう、何か自分の言ふことを幾分の人が用ゐて呉れるとそれとて宜いとかいふ位な事でありませうけれども、日蓮聖人の活動はさういふ小さい目的で起つたものではない、どうか總ての人をして墮落の生活から脱して、意氣のある人生を送りたい、折角人間の世に生れて來て、一生を棒に振つて行く、この生活の意義といふものを諒解せずして、親が生んだものだから人間に出來たのである、腹が減るから飯を喰ふのである、睡くなるから眠るのである、草臥れたから欠伸をするのであるといふだけで、生涯を無意義に了るものであつたならば、如何にもこれは残念な事

てあります。人生一たび去つて又還らない、かういふ人生が再び得られるか得られないか、佛の教に依れば三千年に一たび花咲く優曇華の花よりも難く、人生には容易に出られぬのである。法華經を見てもさうである。生れかはり死にかはりする多くの生活は餓鬼であるとか畜生であるとかいふものゝ方には度々行けるけれども、人間になつて来るといふのは餘程の功德を積み、因縁熟して初めて人間に出て来る得難き人生であつて、失ひ易きは人の生命、一度去つては又人間に出て来ることは何時であるか分らぬと佛は仰せられてあるのであります。幸に此人間に生れて、斯様に自分の精神に依つて善惡の分別が出来、善をなさうと思へば善の出来る境遇に生れて居るものである。是が蛇なり何なりになつて仕舞たら、もうどうするとも出来ない、是は遺をこなつた、こんな事ならと思つて見ても仕様がな、善い事を仕様と思ふた所が何も出来ない、ノロノロ這ひ出して来やうものなら、ソラ變なものが出来たといふので石を頭に打ち突けられる、夫かと云つて穴の中にすつこんで居たら何も善いことは出来ない、出てもいかずすつこんでもいかず、幸に人間であるから一つの靈魂さへこゝに極めますれば、其人ノノの力に依つて善根功德も積める、非常に愉快なる人生である、これを何と思ふて暮して居るか、唯だウカノと一日経つた、又一日経つた、大正十年もだんだん早や暮れかけたといふ様な事で、時計を出して時間ばかり見て、ハ、ア六時になつた七時になつたと、夫ばかりぢや詰らぬてはありませんか、最後に至つては一時間百萬圓出して此時間を買ふとは出来ませぬ、此人間の一生を無意義に了つて、最後に後悔した所が取返すことは出来ぬのであるからして、其人生の眞個の意義を教へる爲に、聖者日蓮の如き人が出て教へて下さつたならば、此類廢と不安とを救ふとが出来やうと思つて、更に日蓮聖人をお慕ひする次第であります。(未完)



祖書要文講義

本 多 日 生

五二、持法華問答鈔 因身の肉團に果満の佛眼を備へ、有爲の凡膚に無爲の聖衣を着けぬれば、三途に恐れなく八難に憚りなし、七方便の山の頂に登りて九法界の雲を拂ひ、無垢地の園に花開け法性の空に月明かならん、是人於

佛道決定無有疑の文憑あり、唯我一人能爲救護の説疑なし、一念信解の功德は五波羅蜜の行に越え、五十展轉の隨喜は八十年の布施に勝れたり、頓證菩提の教は遙に群典に秀て、顯本遠壽の説は永く諸乘に絶えたり、爰を以て八

歳の龍女は大海より來つて經力を刹那に示し、本化の上行は大地より涌出して佛壽を久遠に顯す、言語道斷の經王心行所滅の妙法なり。(遺文錄四七一)

この「持法華問答鈔」は、得益に就て種々結構な意味が總括されて居るのであります。即ち現在未來に亘つての得益が示されて居りますが、始めの「因身の肉團に果滿の佛眼を備へ、有爲の凡庸に無爲の聖衣を着けぬれば」といふ所は、法華經の信仰に依つて人間の身の中に佛性を備へて居るのみならず、佛性とは佛の覺を有つて居るのであるから、人間の身に佛の覺の眼を備へて居る、他の言葉を以つて言へば小さき我に大きな覺の佛が備はつて居るのである、それは法華經信仰の利益としてその佛眼の光が

益々輝くやうになつて居るのである。又「有爲の凡庸」といふは有爲轉變の無常の凡庸の身體であるけれども、それが法華經の信仰に依つて「無爲の聖衣」といふ佛様の覺の衣を着て居るやうな譯である。「衣」と言つたのは後に三途の川に於て衣を剝がれるといふことがあるから、凡庸の衣服を着て行つたならば、三途の川に於て裸體にされる譯だけれども、無爲の聖衣を着けて即ち法華經の功德を有つて居る身であれば、三途の川に於ても恐を懐くこともない「八難」といふ地獄の苦み、或は劍の山に登るとか、血の池に投ぜられるといふ事にも憚ることはない、さういふ所に行く譯ではないけれども、假に行くとしても恐れは無い譯である。「七方便の山の頂」といふのは、佛の覺が五乘七方便と言つて、人間、天上、聲聞、緣覺、それに菩薩の中の藏教の菩薩、通

教の菩薩、別教の菩薩といふ三つの菩薩の階段を加へると、それが丁度七つの數になるから、人間からして菩薩の地位に上り、尙ほその上につて別教の菩薩の上の圓教の菩薩といふ、最も善き覺を有つて居る地位に立つから斯う言つたのである。「九法界の雲を拂ひ」といふのは、地獄から餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩までを九界の迷ひと言つて居るが、その迷ひの雲を拂つて佛様になることが出来る。さうなれば「無垢地の國」といふ一點穢れの無い淨土に花開き、「法性の月明か」といふやうな、洵に結構な覺の生涯に就くことが出来るのである。それ故に「神力品」の結文の「斯の經を持つ者は佛道に於て決定して疑ひ有ること無けん」といふ文が洵に頼みある譯で、この事は自分で成佛が出来ると思ふのではなくして、佛の方から許された經

文であるが故に、之を「允可決定信」と言つて居る佛の方から許可を與へられた信仰である。病人が自分で癒ると思ふのではなくして、名醫があつて「モウ心配は無い、必ず快復します」といふ確實な保證を與へて呉れたやうに、佛の方から成佛を保證せられたのであるから、誠に頼みある譯で、その事を考へれば如何にも有難い譯である。又「唯だ我れ一人能く救護を爲す」と説かれた、この釋尊がお護り下されるといふことは一點疑ふ所はない、これは法華經の信仰をする者は必ずこの信念に立つのであつて、これがハッキリしないで誰から守つて貰ふのか分らんやうな意味になれば、それは法華經を信じて居る人とは言へないことになる。「一念信解の功德」といふのも上の「壽量品」の佛に就いての信念であつた唯だ法華經と言つても茫漠として經卷を指しては居

らない、この一念といふは上の「壽量品」に説きし本佛顯本の教——教とはいふけれどもそれは佛に對する意識信念であるから、一念信とは本佛を渴仰隨喜する所の心である。その功德は五波羅蜜といつて六波羅蜜の中の智慧波羅蜜を除いた他の五つの行を積んだよりも優つて居る。「五十展轉の隨喜」——始めて法座で「壽量品」を聞いたその喜びを次第々々に傳へ傳へて、五十人目まで行つて最も稀薄になつたその僅かな隨喜の功德すらも、八十年の長き間種々の布施の行を積んだ功德よりも勝れる、これは皆法華經の「隨喜功德品」に説かれて居る事を舉げられたのであります。又一「頓證菩提の教は遙かに群典に秀で」——「提婆品」の女人が成佛をした時の如く、洵に速かに佛様に成り得たので、長い間種々に廻り廻つて行を積むのではなくして、法華經の信仰

決定の其處に直ちに菩提が得られるといふ、「提婆品」には「忽然の間に」とか「復たこれより速かならん」と説いて、非常に速い意味がある、それが頓證といふ事で、その意味合は他のお經に於て永らく經歷つて漸く覺を開くのと違ふ。さういふのを迂廻の行といふ、その迂廻の行に對して頓證の行といふので、幾度も廻はり廻つて行くのでなくして、速に菩提が得られるといふ事は、他のお經より法華經が秀でて居る。又「壽量品」の顯本遠壽——本佛の始め無き以前より常住にして常に衆生を救うてお居てになるといふ事の説いてあるのは「永く諸乘に絶たり」で、この本佛に對する完全な説明は、他のお經には曾て無い事である。それであるが故に八歳の龍女は大海から來つて經力を刹那に示した「刹那」といふことは頗る短かい間をいふのであるが、即ち

頓證菩提の教を證明したのである。本化の上行は大由より湧出して佛壽を久遠に顯す」といふことは顯本遠壽の説に對して、斯の如く上行出現の事があつた。前に頓證菩提と顯本遠壽の二つを舉げて、龍女の事と上行出現の事を舉げたのである。この女人が速に成佛するといふ事と、佛が本佛であるといふ事の二つが非常に尊といひので、モウ申し様の無い結構なことであつて、そこに法華經の一切經に秀でて居る所以がある、唯だ「法華經が尊といふ」と言つても、本佛を忘れたり、又頓證菩提といふことを忘れて、僅かな現在の迷信になつたりする。現在の迷信に囚はれて居る者は頓證菩提の法華經の有難さを感しない譯である、種々なる信仰の對象に迷ふ者は、顯本遠壽の價値を知らないのだから、「言語道斷の經王」はこの本佛の顯本等に於てその尊き

意味を現はし「心行所滅」と言つて心の働きも絶え、心で推し測つてどの位有難いといふ事が考へられない程有難いといふ、その意味の「妙法」は、本佛の顯本を含んで言ふので、佛を忘れて冷かな宇宙の眞理を指して言ふのではない。斯の如くに洵に結構な覺を開く御利益が法華經に於て得られる、この喜びを持ち來るが故にそれが現在の力となつて來るので、死んだ時に喜ぶにあらざして、現在の喜びとなり、力となつて行く、宗教の力は此處から出て來るのであつて、死んだ先の事をいふのは死んでからの事ぢやと考へるのは大變な間違ひである。丁度學校に入つて勉強して居るのは、卒業以後の活動の爲めであるが、それが爲めに在學中の勉學の力があるのである、卒業以後に起る事を言つたからと言つて、それは在學中の力にならんと

いふやうに解釋したならば非常な愚な話である。宗教が未來觀の方から來る喜びが現在の力となる事を否定するのは、それと同じ愚なことである。

五三 諫曉八幡鈔 月氏より漢土に經を渡せる譯人は一百八十七人なり、其中に羅什三藏一人を除きて前後の一百八十六人は純乳に水を加へ、藥に毒を入れたる人々なり、此理を辨へざる一切の人師末學等、設ひ一切經を讀誦し十二分經を胸に浮べたる様なりとも、生死を離るゝ事かたし、又一分のしるしある様なり共天地の知る程の祈りとは成るべからず、魔王魔民等守護を加

へて法に驗の有様なりとも、終には其身も檀那も安穩なるべからず、譬ば舊醫の藥に毒を雜へてさしをけるを、舊醫の弟子等或は盜み取り或は自然に取りにて、人の病を治せんが如し、いかてか安穩なるべき。(遺文錄二〇三三)

この「諫曉八幡鈔」は、小さな利益があつてそれが爲めにその教が正しい、この信仰が誤りないといふことは言へない、大本教、天理教などに於て一寸と靈驗があつたやうに見えても、さういふ事に依つて宗教を撰んではいかぬ。だから佛教の他の宗派に就ても、間違つた教の中にも少しの靈驗のやうな事はある。併ながらさういふ神秘的、奇蹟的のことから宗教を撰び採るのは、洵に危険だと戒めてある。

基督教などでも奇蹟的信仰から入つて行つたならば頗るそれは危ないことになつて行く、大本教に於ても、お筆先といふやうな事に依つていくゝの事を豫言したりして居る、基督教に於ても無間に豫言々々といふ。豫言をしなければ宗教でないやうに言うて來たのは、丁度大本教と能く似て居るが、さういふ事は甚だ宜敷ないと言はれたので、これは法華經の御利益を示すといふよりは、他の誤つた利益の觀念を攻撃した文章であるが、法華宗の者がその攻撃されることと似たやうな事をやり出して居るから、特にこの御遺訓を擧げて、吾々が利益を考へる場合には、さういふ間違つた性質を帯びてはならんといふ事を示す爲に、この一節を最後に擧げたのであります。

佛教が天竺から支那に渡つたに就ては、それを翻

譯する人は總計百八十七人もあつたが、併し大抵間違ひの事が伴つて居るので、獨り羅什三藏は他の百八十六人とは違つて正しい翻譯をせられた。それ故に羅什の評に、外の譯者は純粹の牛乳に水を加へ、藥の中に毒を入れたやうなものだといふ事を言うて居られる、或は母が子供に食べ物を喰はす時に、齒で嚙んで美味い汁を吸うてしまつて、洋ばかりになつたのを子供に喰はすやうな風になつて居る。佛教の美味の所だけは消えて居ると言はれたが、この羅什の批評のやうな點を考へないで、一切の人師また末學の人達が、假令一切經を讀み十二部經を胸に浮べたからと言つても、それは生死を離れることは出來ない、お經の中から間違ひが伴うて來て居る。それ故に佛教の思想研究としては、羅什譯の正確なるものに根據して佛教を批判しない限りには、正しき

思想には達し得られない。又何か靈驗のやうな事を頼みにして、例へば慈覺大師が金剛頂經の註釋を書いて、それが佛の精神に叶ふか否やといふことを講つて眠つた所が、その時に目を弓で射た夢を見た、それが爲めにこれは間違ひが無いと言つたとか、その他いろいろの事がある、さういふやうな愚な事をやつて、佛敎の間違ひが無いといふ證にしたならば非常な過ちを取ることになる。唯だ自分一人に少しばかりの靈驗が見えたからと言つても、天地の知る程な偉大なる靈驗としては現はれて來ない、僅かな事柄はあらうけれども、それは正しい方から來た利益では無くして、惡魔の方からさういふ者を助けなして、寧ろ迷はず爲めに何か驗のあるやうな風に見えるものである。これは邪敎の起る場合には必ず伴つて居る、諸種の祈禱者などが加持祈禱に靈驗があ

るといふ事を以て愚者を迷はして居るが、さういふ事は佛敎にもあれば神道にもあれば基督教にもあるその他宗教といふ名の附かぬ所にもさういふ俗信迷信があるけれども、そんなものは結局は「其身も檀那も安穩なるべからず」——いろ／＼その間に間違ひも起り、遂には刑罰に觸れ、終ひにはひどい事になる、大本教なども今現に刑事問題にかゝつて居る譯であります、その夢が醒めた時分には非常な失敗の跡を残すのである。釋尊の誠めの中にもさういふ風に説いてある。斯の如く多少の靈驗があつてもそれは惡魔の方から來たのであつて、結局は失敗に終ると日蓮聖人は言つて居られる、日蓮門下の種々の祈禱などに利益があるやうに見えても、それはこの誠めを考へて反省しなければならぬ。それは丁度舊い醫者が藥の中に毒を混ぜて置いたのを、その

弟子が知らないでその儘病人に與へると、良き藥と思つたのが毒を入れてあつたものであるから、その病人は毒に中てられるやうなもので、誤つた宗教の慣例の中に澤山毒が入つて居る、それを用ひたならば結局安穩には終らないもので、種々な失敗を残す事になるのである。

であるから日蓮主義は左様な卑近な驗などを以て法の邪正を争ふものではない。法華の方にはこんな御利益がある」と云ふ事を以て信者を作つたり、それも法華經擴張の一部ぢや」と祈禱者などが言ふけれども、それは却つて法華經に累を及ぼすものである大きな國家の安泰を祈るとか、又正しい意味に於ての祈願祈念といふものを否定しないけれども、大體正しい祈願は平生常に祈つて置くべきである。孔子が「丘の禱るや久し」と言つたのは正しい意味で

ある、平常信仰しないで置いて、何か事の出來た時だけ特別にその事を頼む、さうして「利いた」とか「利かぬ」とかいふ、左様な事柄を迷信といふので、天台大師も「終日祈れども終日感無し、終日感無けれども終日悔ひ無し」と言つて居る、一日祈つて何の靈驗も無くても少しも後悔する事は無い、所謂「人事を盡して天命を待つ」のであるから、其處までは盡すけれども、その以上は神の任意、佛の任意、吾々人力の及ばざる所と考へた、正しい意味に行くが宜い。丁度日蓮聖人が「天も捨て給へ、諸難にも値へ、身命を賭して正義を守り通す」と言つたやうに唯だ御利益を目的にして正義の觀念を捨てた時には教は濁つてしまふものであるから、利益の觀念が却つて教を濁すことが多いといふ爲に、特に日蓮聖人が之を誠め給うたのであります。

婦人の覺悟

(於當徳寺妙教婦人会)

陸軍少將 丹羽 剛

文責 在 記者

私は只今御紹介を受けた様に、青年團の方では時々演説をやる事もあります、婦人会で致すのは初めてであります、殊にこう云ふお方々の前で御話をやる事は私の非常に喜びとする所であります。今も色々お話があつたが、世の中は段々面倒になつて

來ました、例へば奥さんを貰ふにした所が、丸髪がよいとか、ハイカラの方がよいとか、色々の選擇をするやうになりました、そして同じ婦人でも世界的婦人を選ぶ様になりましたが、我國の婦人は先づ日本の婦人であると言ふ事を考へ、其所に土臺を置いてそれから世界的婦人はどうであるかと云ふ事を、考へねばならぬのであります。そう云ふ譯で我々老

人は持ち切れぬ世の中となつて來ました。

此頃世界の大問題となつて居るのは、先づ労働問題、婦人問題及び教育問題の三つてあります。所て労働問題はどうかと云ふと、金持の方では澤山の資本を投じて大きな工場を建て、労働者を働かしてやるのであるから、利益の大部分は自分等がとるべきであると云ふ者があるのであります。労働者の方では、資本金が幾ら金を積んで置かう共、吾々労働者が働かなかつたならば、利益は少しもあがらぬ、故に儲けた金の大部分は吾々の方へ渡すべきであると云ふのであります。そう云ふ風に労働者も資本家も自分の方に都合のよい様な、勝手な事許り申して居

るのであります。

もう一つは婦人問題であります、これも随分やかましい問題となつて居るのであります、然しこれも婦人が跋扈して、男子の權利を蹂躪してもいけない、又男子が跋扈して女子の權利を蹂躪してもいけないのであります。それからもう一つは教育問題であります、これも近頃はやかましくなつて居るのであります。昔は教育を受くる者は實にまれでありました、然し今日は國民として何人も受けぬ者はないのであります。所て其の教育がうまく出来れば問題は無いのであります、それがなかく／＼うまく行かぬのであります。此頃或る女學校へ参りますと、校長さんの御話に、私共は皆さんの女子を教育して居りますが、實はどう云ふ教育をやつてよいか分りません、皆さんの方に何かよい考へがありましたら、腹藏なく云ふて貰ひたい、私共はそれに依つてやりたいと思ひます。實は此頃女學校の校長會議が

文部省でありました、其の席上で文部當局者が云はれるには、近頃女學校の評判が悪くて困るから、もつとよくやつて貰はなければならぬ、とそこで或る校長が、評判の悪いのは何所の女學校ですかと尋ねたら、それは日本國中皆評判が悪いと云はれましたので、校長はそう一般に評判が悪いならば、吾々は之を投げ捨てねばならぬと申されたそうてあります。

私もつら／＼教育は困難なものだと思ふて居ります、例へば女學校を卒業された娘さんが、お嫁に行くのと、直ぐには殆んど間に合せぬ、商店へ行くと、成程地理や歴史は少し位知つて居るけれど、其の商店には間に合はぬ。此頃或る農家の娘さんが、女學校を卒業してから、農家へ嫁入させようと思ふたら農家はいやだと云ふてどうしても行きません、それでは農家に向つては不向きなのであります。私にも娘が澤山あつて、それ／＼嫁がせました、中には陸

軍の方も海軍の人もありました、然しさう云ふ所ては別に苦情がありません、所て女學校出の娘を嫁に貰ふて、亭主がありがたいかと申しますと、一向有難くない様であります、少し許り英語を知つて居やうが、學術や國語をやらうが、それ許りては何の役にも立たないのであります。夫故先づ今日の學校教育は人格養成を根本にしなければならぬと思ひます。智識は第二の問題であります、そうせぬ限りは何所へ行つても不向きで、何所へ行つても評判が悪いのは、無理のない事であります。従つて教育問題は世界の難處となつて、學者の頭を悩まして居るのであります。尙校長が云はれた中に、色々考へては居るがどうも名案がない、それかと云つて引込思案の賢母良妻主義は採れない、との事でありましたが、私にはそれは反對であります。前に川島君から色々御話がありましたが、エレン、ケイの思想を引かれて、結局は賢母良妻主義と云ふ事でありました、私もそれ

には賛成であります。私は何所迄も賢母良妻主義てありませんが、然しそれが校長の言はれた引込思案とは、少し了解に苦しむのであります、第一賢母良妻主義と云ふのは、時代に依つて變るべきであり、又家庭に依つても變るべきであります、それが變らなければ、賢母良妻主義ではないのであります。そこで夫婦の關係を大昔に溯つて考へて見たいと思ひます、それも歴史のない大昔の事であり、甚だしい人は、吾々の祖先は猿であると申しますが、兎に角吾々の祖先が野蠻時代の時を考へて見ようと思ふのであります、がどうして考へたらよいかと申せば、今日の野蠻地へ行つて見れば分るのであります、アフリカの内地や南洋の極野蠻な所へ行つて見ると、女とか娘と云ふ名はあるが、奥さんと云ふ名はないのであります、又嫁入りとが嫁入りと云ふ事もありません、男女が十日許り一所になつて居つたかと思ふと又分れる、一所になつて居るかと思ふと

分れる、丁度今日の動物と同じ有様であります。吾々の祖先もそれと同じ時代があつたであらうと思ふ即ち婦人は其村の共有であつたのです、であるから又男子も其村中の女の共有物と云ふてよかつたのであります、そこでいよいよ村中の共有物になると、女尊男卑と云ふ事になつて、女の勢力が旺盛となり男の勢力が認められなくなつて來たのであります、先辯士のナイトの話の如く武士が婦人の前に跪く様になつたのであります。さうなると男子は女の歡心を買はんが爲に、男を磨きあげたり、兎に角女の歡みを甲斐がある様に立派な人格を造らなければならぬ事となつた。此の女尊男卑の風は長く續いて、日本でも大昔はさうであつたらうと思ひます。然し男子が男を磨き腕を磨きあげて來ると、中々立派になつて、

でも同じで、モハメット教などでは、四人が正妻で其他を妾と呼ぶのであつた、東洋も殆んど同じ様な情態でありました。然しヤン教は何所迄も一夫一婦主義でありました、ヤン教は其教義の典に於て佛教と比較すれば、非常に淺薄なものと思ひますが、それにも拘はらず歐洲を風靡するに至つたのは、確かに此の一夫一婦主義が其原因の一つであらうと思ひます。

途には女の勢力を壓倒する様になり、今日では色々方面に於て、婦人を辱かして居るのであります、そこで一夫多妻の世界が生れたのである、昔は何處

日本も神代に於ては女尊男卑の風俗であつたが、時世の變遷と共に男尊女卑の國となつた、それも鎌倉時代以後の事であらうと思ひます、其頃武士は多くの土地を所有して居つたが、外出勝ちなので留守の奥さんが莊園の世話をしたり、雇人の監督をしたりして居つた、兎に角婦人は家に居つても澤山の仕事があつたからして、世の尊敬も受けて居つたのであります。所が足利時代になると戦争が毎日の如くに續く、織田徳川時代の初めに於ても、戦争が繼續

して居つたので、武士は皆一つ所に集つて所謂城下住居をする様になつたのであります。名古屋ならば名古屋城の周圍に集つて、兵營生活を送る様になつた、故に武家の妻君連中は小作の取締りも出來ず、自づと仕事がなくつたのであります。そう云ふ譯であるからして徳川時代の賢母良妻主義は、子を澤山産んでそれを養育して行くより外はなかつたのである、昔は活動主義の婦人であつたが、徳川時代に入つて戦争の爲め、非常に困難な時代となつたのである、何故なれば婦人が小供を産まぬとお家は斷絶となるので、どうしても小供を産まねばならなかつたのである、それでは澤山産めばよいかと云ふに、澤山産んでもいかなのでありました、莊園時代には小供が三人あれば、財産を三等分する事が出來たのであつたが、徳川時代になると二男三男には財産を分けてやる分には行かぬ。仕方なしにお寺へ貢つて貰ふか、それもいやと云へばまさか百性と縁組も出

來ぬと言ふて、何所かへ捨てるのである、それを太郎兵衛が拾ふと云ふ様な譯で、澤山生んでもいかにし、又一人も小供がなければ「子なければ去る」とか申して臈に厄介な時代でありました、兎に角これが徳川時代に於ける賢母良妻主義であります、それを其儘今日の時代に持つて來やうとする人があつたらば、其人は實に愚なる人であります。

先程申した様に、今の世の中の事を思へば直ぐ分る、成程大會社の社長の奥さんは別に大した用事はないので、よい小供を澤山産んでそれを教育してよい人にする、つまり昔の人と同じ地位にあると思ふ、が其工場に働いて居る婦人はどうか、主人が工場に出て働いたゞけては暮しきれぬし、又小供を養ひ之を教育して行く事も出來ぬので、妻君も一所に出て働く、斯の如き家に於ける良妻賢母は、外へ出て澤山お金をとらねばならぬのである、故に工場主の良妻賢母と、職工の良妻賢母とは違ふのである

それを一つ型にはめやうとするからいかなのである、實物になると文字と違つて一軒毎に變り、其家に應じて行く様にせねばならぬ、女學校の教育も一の型に入れず、何所へ行つてもあてはまる様にせねばならぬ。故に教育問題は先づ第一人格を造ると云ふ事にあつて、其他は第二の問題である。他人の悪口を云ふ様だが、學校の良教師と云ふ方は、師範學校を昨年卒業して來た方であるとか、餘り社會上經驗のない方であるから、困難の上には困難となる譯であります。大體に於て賢母良妻主義は、小供を澤山産んで立派な人に仕上る事でありませぬ、此點は男に出來ない長所であるにも拘らず、それを忘れてたまにはお前さんも産みなさいと云ふて男と腕競べをする様では國家の大損害である。婦人達が参政權を得やうとして、天賦の特長を捨てる程愚なる事はない、各人は自分の特長を發揮して、社會國家の爲に盡すが最良策である。

殊に近頃は婦人の道德的方面を御話すると、そんな事は古臭いと云ふ、此所にはありますまいが、東洋の事は古くて駄目だ、何でも西洋に限ると、若い人は思ひ易い様だが、それは間違ひであります、西洋でも偉い人は、婦人は婦人としての道德を守つて居るのであります、今其一例を上げますと、アメリカ第一世の大統領ジョージワシントンの母であります、母はワシントンが大統領になつて居た時、田舎で百性をし大變骨を折つて居りました、其所で或る人が其母に向つて、あなたは大統領の母であるからそんな百性などせず安樂に暮したらよからうといひました、すると母の言ふのには、ジョージは大統領であるから大統領らしい生活をせねばなりません、私は斯の如く田舎の婆さんであるから、田舎の婆さんらしい生活をすればよいのであります、殊にジョージは戦争をするやら、色々難儀な役目を言ひつかつて居るから、大統領の役目が終つたらば歸つて來

て樂な生活をさせたいと思ふて一生懸命働いて居ります。又此村は大統領の出た村であるから、厄介な人が出る様な事があると此村の名折れになるから、其方面にも骨を折らなければなりません、それから雇人などは、私が一所にやればよく働くが、さもなければ横着しきすから、折角の事だが此生活形式はやめられぬと申されました、それからワシントンには首尾よく大統領の役目が終つて田舎へ歸り、母の元で餘命を送られたが、母も八十歳迄存命して樂しい生活を送られたのであります。此母が老後の事を思ふて一生懸命働いたのを見れば、吾々日本人は決してアメリカ人を拜金主義だと言ふて、一概に笑ふ事は出来ぬのであります。日本には維新當時、功勞に依つて伯爵になつたり、或は勳章を貰つたり、色々の恩典に浴した人が多いたのであります、米國では獨立戦争を七年もやつたが、皆國の爲自由の爲に戦ふたのだと云ふて、何も貰つて居りませぬ、それに競べ

ると日本人は、慾の深い方面にはナカ／＼頭を下げて居ると云はれても仕方がないのであります。餘程以前の事でありましたが、大隈伯が九段下に十萬圓許りの家を建てたが、當時大隈伯の奉給全部を集めても、あの家を建てるには足らぬと云ふ評判が高かつたのであります。又此頃特別大演習の折、第四師團が東京に宿泊致しましたが、第三十三聯隊の將校の話によると、或る侯爵の家に宿つたさうであります、其家では兵卒などには宿をしないと云ふて居つたが、非常に大きな家で、夜風呂へ入る時女中に案内されて行つたが、餘り家が廣い爲め歸り道が分らなくなつて了ふた、どうしても分らぬので仕方なしに元の風呂場へ戻り、入口の所に座つて居た、所が家の人達は餘り歸りが遅いので、どうしたのかと見に来て呉れたので、やつと助かつたさうだが、そう云ふ家が何時の間にか出来た、私に云はせると鬚氣樓式に出来たのである、兎に角元を尋ねれば足輕か

何かであつたものが、何時の間にかそんな風になつたのである、これをワシントンに競べると、決して日本人はアメリカ人を拜金主義だと云ふて笑ふ事は出来ぬのであります。

段々話が長くなりましたが、ワシントンの母の如きは實に立派な人格を備へた婦人だと思ひます、一面には小供の事を考へ、一面には社會の事を考へて其村から悪人の出ぬ様に勉め、又例へ小供は大統領であつても、自分は田舎の百姓として暮したなどはなか／＼出来難い事でありませぬ、日本の女であつたならば、小供が大統領になつたり又は金持ちになつたらば、直ぐにかはり易いのであります、何卒皆さんは益々人格を磨き、どんな事があつても周圍の爲に動かされない、立派な信仰を持たれん事を切望致します。(終り)

本多日生猥下講演
教育勅語と思想問題

統一臨時號既刊

三六版紙數壹百頁

一部 金貳拾錢
郵税 金貳錢

百部以上貳割引、五十部以上壹割引。
施本用は御相談の上特別の扱とします。



思想問題

遠慮なき皇道大本教の批判

記者

以上七章に傾ちて批判したる大本の内容は、要するに他愛もなき愚説の塊りに過ぎぬが、其の包含する毒素の多きは注意すべき事である。吾輩は更に進んでこれを筆誅するの意志を有する者であるが、彼等が如き荒唐無稽なる論説を真に受けて、一々之れを論駁するが如きは、畢竟閑文字を弄するに過ぎざるを覺ゆるのである、よつて吾輩は第八章として簡單に皇道大本教は如何なる點に於て注意すべき毒素を有するやの一端を列叙し、前七章と相俟つて吾輩の所見を明にしようと思ふ。

(一) 神界の主宰は天照大神にして、歴代の皇統は

其の靈統を繼承し給ひ、地上の大守護神は國常立の尊にして出口家其の靈統を繼承すとは大本の主張なり、果して然らば現界は果して何人の主宰する所ぞ、此點に對しては彼等も尙我が皇統これを主宰すと斷言して疑はずと雖も、遺憾ながら其の内容は極めて曖昧なり、我が皇統は宇内に君臨すべき大靈徳を有し給ふとは彼等の稱する所なるも、神政一致の主張と相照し寧ろ大本の主なるを思はしむるが如き傾向あり、何となれば彼等は出口家(大本教主)を通ずる外神意を傳ふるものなしとの主張を固執すると同時に、神政一致の主張を力説するが故に、其

の終局に於て神論を綾部に請ふにあらざれば神政を行ふ事能はずとの歸結に達すればなり、此間我崇高なる御國體を破壊せざれば止まざるの意義を包含する事明なり、此一事の如きは斷じてこれを恕する事能はず、要するに從來志を得ずして世上に出づる事能はざりし國常立の尊は、今や其の地位を恢復し世界再造の最高主宰者として顯れ、先第一に舊世界を破壊して神世の古に復舊し、自ら進んで萬機を親裁せんとするの主張を存するものにして、世の建替建直と稱するも畢竟此の意義に外ならざるに注意すると同時に、「世は持きりには致させぬぞよ」の神論は最も注意すべき價値あり、此點に對しては識者の一考を煩はさざるを得ず。

(二) 綾部は神都なりとの主張は噴飯に値する滑稽事なるも、此主張は彼等の生命とも稱すべき大本教の大信條なり、然れども彼等の此主張は少くとも大本教々化の中樞にして、最も神聖なりと稱する三五

七殿に狐狸天狗の如き醜類の自由に入出し難き威嚴を有せざれば成立せず、狐狸及天狗の族をも神化せんとするは大本本來の主張にあらずして、人間をして彼等の惡化を免かれしめんとするにあるが故に、此一事は彼等に取りて最も大切なり、必ずや彼等狐狸の輩が大本に近づくと同時に、依憑の醜類自ら恐怖し倉皇身を隠して人體を去るが如く、神的色彩の濃厚なるを期せざるべからず。依憑の醜類をして審神者と對抗論議せしむるが如きは、神威の程も察せらるるにあらずや、元來大本の教化は依憑の醜類を離脱せしむるを最終の目的とするものにあらずして神人合一の境界に入るべく教化せんとするにあるも若し大本をして彼等醜類の出入自在を得せしめ、大本の神境は唯神の靈地にあらずして神魔俱樂部とも稱すべき混濁の巷ならしめば、大本に入る者をして反て彼等の依憑に喰入らるるの患あらしむるものにあらずや、千金の兒は盜賊の爲に死せず士君子の近

づくべからざる處なり、故に吾輩等の大本に入るは大本が降魔の目的を全ふし、大本には魔類の片影なく審神者の間に對して顯はるゝは、正に魔類を撃退若くは撃滅したる真正の守護神のみなる境遇に進みたるの後ならざるべからず、何等の用意なくフラフラと彼等の群集に入るは、何等の豫防なくして傳染病流行地に入るが如しと謂はざるべからず。

(二)元來大本の所謂靈主體從は無稽の謬説なり、彼等の希望は靈主體從にあらずして惡靈の跋扈を避けんとするにあり、體は元來靈の容器に過ぎず何等の意志なく活動なしとの大本の説を是認する時は此意義更に明白なり、然るに大本は此の容易なる分別をすらこれをなさず、變性男子變性女子の説と相俟て我國最高道德の一たる夫唱婦隨の道を誤らんとするは決して寛恕すべきにあらず、女子の男靈を有し男子の女靈を有するは通則なりとは大本の主張する處なるが故に、靈主體從の説と連結して一轉化を試

むる時は、自ら婦主夫從の家庭となり婦唱夫隨の實を見るに至らん。而して尙更に留意すべきは夫婦の關係は體の結合にあらずして靈の結合なりとの主張なりとす、若しこの主張にして一たび轉化せば愛を失せる男女間の結合より相愛する男女間の結合に移るは神意に合すとの妄斷を生ぜん、其の甚しきに至りては男女の間に兒を擧ぐるは神意に依り神靈を分與せられたるものにして、決して父母の力にあらずとの主張を有するが故に、更に一轉惡化せば不正なる性的結合によるも、其の受胎するは神意に合するものなりとの妄想を生ずるに至らん、如此葬倫を紊り社會の安寧を害し、風俗を壞亂するものは斷じて恕すべからず。

(四)鎮魂歸神の法は彼等妖教の常用手段に過ぎずと雖ども迷執多き識者に對し、精神的影響を與ふるところ大なるは争ふべからず、而して其の結果或は神聲を聞き、或は神影を見、全然精神病者と選ぶな彼等の所謂歸神なるものは、其の結果一部若くは全部の精神病者を作るに終らん、其の然らざるものは世人を蠱惑せんとする無信無耻の強者にあらざれば大本を利用して口を糊せんとするの似而非信者か、然らざれば未だ歸神の域に至らずして神を見ると自稱する一種の妄想狂者なるべし。如此きは社會の堅實なる思想を破壊せんとするものにして、一日も不問に差置くべきものにあらず。

さの行動を爲すに至る事多し。彼等はこれを以て精神病者にあらずして、神人合一の境遇に入りたるものとなさんも、靈體兼備の人類をして靈ありて體なきものと其の行動を一にせしめんとするが如きは、既に大本自身の精神病者たるを證するものにあらずや、時間空間を超越せざれば神人合一の境遇に入れりと稱する事能はずと主張するが如きは、靈を偏重して體を無視する空論にして決して正道にあらず、人類の依るべき眞の正道は靈主體從を否定し、體主靈從をも否定し靈體融合して不二なるにあり。

(五)大本の神論は恐怖すべき豫言を以て人を威嚇し、人に悔悟を迫り天國來を叫んで人を呼集せんとするに過ぎず、始んどの人を啓誘して思想を善導せんとする何等の教義あるなし、裏の神論に於ては少しく其の意あるを認め得べきも、これまた何等の注目に値するものにあらず、其の説くところ縷々千萬言を重ねるも、其の歸する所畢竟綾部に來れ而して變性男子を信ぜよといふに過ぎず、悔悟の上に踏むべき人道に就ては神意のまに／＼萬事を行ふべし、

神の命は理義を超越したる高處にあり、世の所謂學問の如きは其の麓をだも覗ふの資格なし、何事をも思料すること勿れ唯々大本を信ぜよ、而して後汝等は神の選民として無上の光榮と幸福とを享くべしといふに過ぎず、強て其の教ふる所を求むるときは、四足を食ふなけれ散髮するなけれ外字を重ずるなけれ、大本以外の神を信するなけれ、何物をも吝むなけれ悉くこれを神に奉還せよ、大本に奉仕するは最高の善なり、唯一の救ひの道なり、教祖を崇敬せよ彼は世界獨一の教親なり、國祖の表顯なり、神世來を信ぜよ各人に依憑あるを信ぜよ、而して其の惡しきものを放逐して善神の守護を享けよといふに過ぎず、忠孝を絶し信義を絶し仁愛を絶し夫婦の道を絶し、唯々神意に従ふを美とすと教ふるに過ぎず、徳教上よりこれを見るも何等の價値なく、宗教としてこれを見るも何等の價値なく、たゞ人心を誑惑して一迷信に把住せしむるに過ぎず、其の説く所國

本を重じ國風を發揚せんとするにあるが如きも、其の信仰の中心は所謂良の金神國常立の尊にして天照太神にあらず、國本を重んずるの意義と殆ど相容れざるものあり、彼の長をとり我短を補ふを旨とし、外來の思想を咀嚼してこれを日本化せざれば已まざるは我國風の最美點なり。

然るに大本は全然排他の主義をとり二千年間我國に攝取し來りたる國風をも捨てしめんとす、其の説く處荒唐無稽とるに足らずと雖ども、衆愚を蠢惑するの力決してこれなきにあらず、漫然彼等の存在を許し著々彼等の蠢惑作用を逞ふせしむるが如きは、決して愛民の趣旨にあらずべし。

(六)宇宙の萬象は神の所有にして人類の所有にあらず、何物をも個人の私有を許さず、此點に就ては畏れながら上 天皇陛下と雖ども同様にあらせらるゝとは大本の主張なり、然れども人類の有する私有權は神人間の關係にあらずして、人類相互の主張に

限るは識者を持たずして明白なり。所謂所有權なるものは他人の來てこれを侵害するを許さざるを示すものにして、天變地異の爲に損害を受くるも何等人爲のこれに伴ふものなき場合に於ては何等の要償をもなし得べきものにあらず。要するに所有權其の物は人類間の秩序を維持し、社會の安寧幸福を維持せんが爲に定めたるに過ぎず。大本の主張は此簡單なる通義をも無視し、土地の所有を非認し財産の所有權をも否定せんとするの主張を有するが如し、果して然らば大本の徒が無智無學にして是等の簡單なる通義をも悟り得ざるにあらざるよりは、何事か爲にする所ありて此の如き暴論をなすものと解釋するの外なし、此點に對しては公安を破壊するの毒素として、十分に取締るべき必要あり。

(七)所謂神諭なるものは要するに誇大妄想狂に罹れる一老婆の嘖語にして、其の豫言の如きも何等の價値あるものにあらず、其の會々今より顧みて適合せ

るが如き處あるものは、其の時代に於て少しく思慮あるもの、考慮せる範圍内に屬し、たゞ無責任なる壯語を斷定的に放てるに過ぎず、其の豫言の適中せざるは其の死によりて明白なり。若し夫れ世界の建替建直の如きは幾多の通路と牽強附會すべき斷定的嘖語を有するが故に、固よりこれを信憑し得べきものにあらず、然れども二三附隨者のこれを説くに當り言靈學と鎮魂歸神の法と加へて、百方構成するところあり反て種々の危儉なる分子を包含するの結果をなせり、而かも其の結果は一種の不埒なる思想を生じ、其の宣傳者をして左の言をなさしむるに至れりと云ふ。

恐れ多くも我天津日嗣 天皇陛下は第一位の天津神即ち天照太神と第一位の國津神即國常立大神と感合せられたるものにして、靈は天照太神の皇性靈、體は國常立大神の男性體の精氣を受けさせられ、茲に男靈男體を併有せられ教祖直子刀自の靈は主と

して國常立大神、證は主として天照太神の精氣を受けて(靈體共配合の割合等は皇室の場合に準ず)茲に女體男靈の變性男子を成形せらるゝ以上連る處に依れば皇室は天の祖神天照太神の靈統、出口家は地の祖神國常立太神の靈統を繼承せられ、一は男子一は女子を繼承者と定められたり、毫も矛盾なく兩立し得べく、皇室は兵馬賞爵の大權を擁し世界に君臨せられ、臣民を保護し尊敬を受け賜ひ、出口家は神の道の人類に宣傳し社會人心を指導し平和安樂に其の天職を盡さしむる事を處掌せらるゝものと解くべく

(終り)

醒めたる協力

兒玉常宣

日蓮主義の思潮が、溜濁せる現代の思想界に掉さして、都鄙の別なく、一般社會人士の傾聴するところとなり、又日蓮主義的思想運動が如何ばかり、家

庭的、社會的に、將又國家的に、強烈なる刺激と活氣とを與えつゝあることは、各種の方面に於いて立證するに餘りあるが、又他面より考察する時は、大

いに反省して見なければならぬ點がある、例之へば或教團とか、或行者、信者中にありては、謬れる信條に墮し、日蓮宗と云へば、狐狸野干憑き落し、病氣平癒の祈禱、と云ふ如き事を行ふ事が特色であり法華經の功德は所謂現象利益にあると云ふ如き見解よりして、盛に吹聴して居る者がある、かゝる事の爲めに一方よりは非常なる誤解妄斷を享けて居る事も争はれない事實である、尤も嚴密なる意味に於いて云ふならば、曲解する者にも罪はあるけれども、又曲解せしめる如き行爲や言語を敢てする者にも罪がある、此の如き状態にあるならば、何時の時にか皆歸妙法の實績を擧げ得るであらう、斯様の有様にては、本佛出世の本懷、宗祖降誕の元意も無意味となり、社會教化、思想善導の基準を謬り、最高文明の源泉たる宗教も亡滅する事になる、思ふに宗祖が遺文中に法華經の行者の祈りの叶はぬ事はある可からずと、示されて居る事も必ずしも、狐狸野干憑き

皇室と出口家とは殆んど日と月との如く併立して何等の矛盾なく、車の兩輪の如く彼此相扶け經となり緯となりて天地の經緯に任じ給ふものとす。

これ果して認容すべき思想なりや、如此不埒なる言説をなすものに對しては、國家の制裁最も峻嚴ならざるべからず、況んや更に進んで出口家を以て大權の掌握者に擬し、皇室を以て君主の虚位を擁するに過ぎざらしめんと放言する徒輩すら彼等の徒中にありと傳ふるをや。

落しや所謂病氣平癒を意味されたものでもなく、本佛釋尊は勿論吾等凡夫の惡想妄見に墮し、正法正義に悖り爲めに苦患に沈淪せる者を救濟し、常樂我淨の本土に遊樂せしめんためなるとは經典中諸所にうかゞはれるところである、言ひ換ゆれば佛教徒としての祈りとは、低級なる現世祈禱ではなく、現世安穩後世善生である今一步進めて云ふならば、人生最初でありしかも最終の目的たる成佛と云ふ事に外ならぬ、「日蓮幼きより今世の祈りなし唯だ佛にならんと願ふばかりなり」又「若し佛意に叶はぬ事ならば信ずとも豈に成佛すべきや又是を以て國土を祈らんに當不起不祥哉」と示されて居る、之等の文を以て見ると、吾々信者行者は能く心得て佛意に叶ひ、奉らなければならぬ、今日の如き思想界紊れ、闢謬堅固、白法隱没せられたる時代にありては、大いなる決心と覺悟とを持つて立たなければならぬ、宗祖が妙法蓮華經の五字、末法の始めに一闍浮提にひろま

らせ給ふ可き瑞相に日蓮さきがけしたり、わたうども二陣三陣つゞきて、迦葉阿難にもすぐれ、天台傳教にもこえよかし」と申されたが、果して今日聖人の教を奉ずるものにして、皆其の覺悟があらうか、若し其の覺悟がないならば、徒らに題目を口唱し鸚鵡返しに宣傳をなすとも聖人の御心には叶はぬ事であらう、迦葉阿難にもすぐれ天台傳教にもこえると云ふ事は如何なる意味であらうか、いふまでもなく末法五濁の今日に生れ、法華經の信者行者たるものは邪法邪教、惡思想宣傳者等と闘ひ、法華一實の教法を弘め人生生活の安定淨土實現のために盡すと云ふ事に外ならぬ。されば聖人御自身にも、日蓮が法華經の智解は天台傳教には千萬が一分も及ぶ事なければ共難を忍び慈悲のすぐれたる、事はおそれをもいださぬべし」とあつて大小幾多の忍難中にしかも、歡喜法悦の御心を持つて、身命を惜まず教化に盡された事は周知の事實である。此の一事に於ても天台傳

教等に勝れたる事自覺されて居るが、此の中には又吾々に對して單なる教理の研究や俗に云ふ生ける字引と化して、一期を終る様の事があつてはならぬ迫害多難の中にも廣宣流布に盡せよと示されて居る、現に聖人は吾等弟子擅那に對して共に聖人の志を繼いで二陣三陣と相續き、末法弘教の大事に當らんとを命ぜられてある。勿論佛陀出世の本懷には古今の別あるには非れども、今日の如き邪智惡人の充滿せる世にありては、弟子擅那等は一層心して三輪の弘教に身命を捧げよと仰せられてある、經には今正是其時と、今日の時代が濁亂して居ると云ふ事に就ては、續連する迄でもなく、多くの不祥事の惹起し不安動搖に驅られ居る事に於いて明である。國土亂れんとする時先づ鬼神亂る鬼神亂るが故に萬民亂れるとは經文に説かれたるところである、實に現今の世相は亂濁の極にあると云はねばならぬ、かゝる時代に當りて、吾徒の大事を成就せん事は容易ならざ

ることであり、前途の遼遠なる事も思はなければならぬが、「極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか」と教えられ居る、吾徒の活動は此時である、而して大事を成ずるに當りては先づ第一着として、各自は大いに私心を去り協力一致して努めなければならぬ。既に聖人は吾等に對して、「總じて日蓮が弟子擅那等、自他彼此の心なく水魚の思ひをなして、異體同心にして南無妙法蓮華經と唱へ奉る處を生死一大事の血脈とは申すなり、しかもいま日蓮が弘通する處の所詮是れなり、若し然らば廣宣流布も叶ふ可きものか」と誡められて居るが、此の事は門下の人には常に口にする處であるが云ひ易くして行ひ難き事である、されど要は各自が無我の努力たる事を自覺する事にある、而して私心を去り異體同心を以て盡さねばならぬ、若し私心を去りて盡す事が、出来ないならば如何に口先ばかりにて、異體同心を叫ぶとも詮ない事

である。自分の地位が保ちたい、自分の名譽を飾りたい、自分の名譽を擧げたい、自分の勢力を張りたい、自分の實力を世に見せたい等と、何事も自己中心の、主義的に私心が紛糾して居る限りは、眞の異體同心に身を捧げることが出来ない、左様の私心の固りの中からこそ、凡ての淺ましき闘争も起り、分裂となり、排擠となり、毀他となり、破壊となるのである、吾々は徒らに眼前の小なる、利害得失問題に囚はるゝことなく、飽くまで大乘教徒としての本領を發揮し、結果を豫想せざる努力（眼前の物的結果の意）言ひ換ゆれば、努力其のものに意義を認め、精神生活でなければならぬ、結果を豫想すればこそ、成功を急ぐ念も起つて来る、利害問題も考へられて来る。義務は負いたくないが權利は得たいと、云ふ様なあさましき念慮も生じて来るのである、斯くては不自信身命の誓言も、全く空言となつてしまふであらう、法華經勸持品中に、諸の菩薩方が、

末法弘教の覺悟を述べて曰く、「我等佛を敬信して、當に忍辱の鏡を著るべし是經を説かんが爲めの故に此の諸の難事を忍ばん、我身命を愛せず、但だ無上道を惜むと云ひ、更らに又、我は是れ世尊の使なり來に處するに畏るゝ所なし、我當に善く法を説くべし、願くば佛安穩に住したまへ」と誓つて居る、是れ等を單なる經文上の物語とし、或は我等以上の行者の心事なりとして、聞き流し讀み流しにしてはならない、諸の難事を忍ばんとは唯だに外敵の意のみではない。薄志弱行の徒は御坐なり主義の生活に慣れ一も二もなく、妥協生活を樂ぶ、しかもそれは他と妥協するには非らずして、自己自ら何事か難事に遭遇する度に、妥協を申込むさうした生活が現代主義かもしれないが、それが軟弱生活を悦び腐敗せしむる素因である、吾々は斷固として、便宜主義を排して諸の苦難の方の精神を、能々味識して見なければならぬ、生きとし生ける者にして尤も大切なるもの

は生命である、其の生命をも惜しまないものが、僅かばかりの、自己の地位や、名譽や、勢力に煩はされる筈がない、同時に利害問題などに心を昏まされる様の事もない、斯くてこそ初めてあらゆる艱難をも忍び大事を成し得るのである。苟しくも法華經を信じ、日蓮主義を奉ずるものである限り、此の理想に向つて進み、努力其ものに意義を認め、お宮仕へを法華經と思召せの教誡にまかせ、醒めたる協力を以て廣宣流布の聖業に盡さうてはありませんか。



華府國際會議に就て

農學士 廣 瀬 常 潤

各利害を異にする國民が彼等の利害關係を調和せんが爲めに、彼等の帝王とか宰相とか乃至は特別の使節が一堂に會合して諸種の相談をなし、協約を議することは歴史上随分例のある話で、古い處はさて置いて、近世に於ては奈翁戦争後のヴェンナ會議、露土戦争後のベルリン會議など、先づ有名なもので何れも文明史上重大なる意義を有して居るには違ひはないが、併し此等は何れも希臘羅馬等同一文明の流を掬み、大部分は耶蘇教の影響を蒙れる、所謂歐洲諸國間の問題で、北米合衆國は之に干與せず、東洋諸國は勿論全然門外漢たるのだから眞に世界的とは云へない、さて然らば先年の巴里平和會議はどうだかと云ふに、其關係したる國家の多數なること、

亦其處理したる事件の廣汎なる事、殆ど世界全般に互りて如何なる點より觀察するも眞に世界的國際會議と稱することを得べく、從て其影響の重且つ大なりしことも推して知るべきものであつた、去りながら少しく根本的に考察を費すなれば、其の文化史上の價値は、今回の華府會議の夫れに比して大に貧弱なることは明ならん、而して其貧弱なると云ふに付ては種々の理由もあるが、少なくとも次の諸點は重要なるものであらう。

(一) 一は君主國一は共和國、全然立國の基礎を異にする日米兩國が、東西の代表者にして、且つ會議の中心たること、

(二) 問題の舞臺が太平洋及極東に跨りて、戦争

の跡仕末でなく、事務來に關すること、

(三) 日本の文明は東漸したるもので、米國の文明は西漸したるもので、有史前中央亞細亞に於て東西に分れ、根本的相背反したる兩文明が、再び接觸するの機を得て、茲に及んで眞に其優劣を試みることに、

(四) 日本は東洋文明の精華たる佛教を代表すること、米國は西洋文化の根源たる耶蘇教を代表すること、

而して此等の點は皆何れも根本的に並行兩立するを許ざるものにて、何れか一方が主となり、他は之に従屬して攝受せられざれば止まざる底の執拗性を有すること、到底英獨爭鬪の比に非ず、恰度羅馬とカルセーテの争の如く、只今次一回の華府會議に於て終結を告げ、永久的圓滿なる平和を將來し得るとと想像するは眞に愚の骨頂と稱すべきものにして、華府會議の如きは今後、種々變形變態の下に開催せら

るゝと雖も、吾々日本人たるものは國難來など、臆病風に襲はれて周章狼狽することなく、例令數十年數百年間此争鬪は繼續するも、(適者生存道法者不滅)て生物学上の眞理に基き絶えず常に確固不拔の信念を以て、機に臨み變に應じ、利己排他主義の歐米人を折伏、或は攝受し、以て彼等の蒙昧を啓發し益々東洋文化の精華を顯揚して、彼等が佛陀の教に隨順するは之れ宇宙の大法に歸順するの謂にして、敢て國の異同、人種の差別を論ずる如き偏狹の問題に非ず、例令折伏たりとも寧ろ彼等の幸福を倍增する所以、即ち人類の不滅を保證すると同時に、人類全般の福祉を永遠且つ平等に享樂するの期を招來し釋尊の所謂「今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子」たるの事實を現實にし、彼等も亦東洋文明の恩澤に浴せしむるの一大覺悟を要す、而して此覺悟を現實化し、此地球をして眞に安穩淨土たらしむるには、單に武力に依りて一時的に優者強者の地位を獲得し

て得々たる如きは大に陋とすべく、立國の大本として武は一日も缺くべからずと雖も、武は只之れ正法擁護の一種の手段方法たるに止まることを自覺せざるべからず、斯くて吾々は決して侵略的のものに非ず、日本人究竟の目的は立正安國法圓冥合なる一大事一大理想を標準として活動しつゝあることを大に

宜明するには、華府會議の如きものこそ寧ろ天裕の幸機會ならずや、何を以て華府會議を指して國難來と唱ふ、全國五千萬の佛教徒十七萬の僧侶、小異を捨て、大同に就き、正直に方便を捨て、直ちに釋尊の足下に參集し、此天裕の幸機會を人類の爲めに活用するの勇と雅量はなき哉。

内在と超越存在

川島常照

今回國友編輯長から最近社會問題の翻譯を掲載せよと命ぜられたので、「社會問題の論理的方面」を譯さうと思ふたが、同書は未だ日本に來て居らぬので、宗教問題を掲載する事に致しました。以下譯する所は「哲學及び心理學上より觀たる神人關係」の一節で、著者はエデンバテ大學の論理及び純正哲學教授セス、ブリンダール、パテソン氏であります。

内在と超越存在の問題は、宗教哲學の根本に觸れて居るものである、然して特に基督教哲學は其の主

なる教義の點に於て、神性と其活動の二つの見解を一致せしめんと勉めたるものに過ぎぬと云ふ事が出来るのである。先づ第一吾人は此の二つの見解が互に反對し合ひ、又排他的なる點を思索して吾人の思想を明瞭にすべく勉める必要がある、それには哲學的に二つの極端を參考としたが最上策である。神性の純然たる内在的存在は、神人間に少しの差別も認

めぬ汎神論と等しいのである。是に對してスピノザの説がよく引用されるが、然し彼の思想と雖も特に「完全の程度」の教義に於ては、吾人により満足すべき理論を指示して居るのである。純然たる内在論又は純然たる汎神論の思想は、東洋の思想によく現はれて居るのであるが、今一二例を引用して見れば、スピノザの所謂「程度の教義」は其の姿を没して居るのである、即ち「學者は婆羅門に於ても、牛や象に於ても、犬や又犬の肉を食する人々に於ても平等に神を認めるのである」と云ふて居るのである。此立論の言ひ現はされて居る一般の宗教崇拜に於ては神性の純然たる内在的合一は自然崇拜の思想と同じ事になつて了ひ、遂には總ての自然力、及び傾向皆悉く是れ神の現はれてあり、神聖なるものであると成す所の多神教に墮ちて了ふのである。斯の如き見解はこれを高等汎神論と區別をする爲に、下等汎神論と呼ぶべきであるが、神靈内在の教義は常に自分

が力説する如くに、哲學の基礎であらねばならぬ。汎神教徒と云ふ名は、神が彼の創造物に等しく現在すると主張する人々の爲に保存すべきであると云ふデーン、インジの思想に對しては、大に論すべき所がある。ポーブが彼の人性論に屢引用したる句は、其哲學的意味を充分に味ふと云ふよりは、寧ろ詩のため頭韻と對句とを合せたのであるが、此意味に於て汎神論の思想をよく言ひ現はして居る。

一本の毛に於ても心と同じく満ちて居り完全である、神のみ前には高きも低きも大なるものも小なるものもなし

神は總てを充たし制限し連結し平等にするのである、斯の如き見解に於ては、向上又は墮落の入るべき餘地がなく、道德や尊き宗教の経験は等しく無意味となるのである、其所には善もなければ惡もない相對的善惡もなく、總てのものが存在のまゝ、平等に神聖であり完全である、然して存在と完全とは同意

義の言葉となるのである。

若しも純然たる内在の教義が、今述べた意味で汎神教と等しくあるならば、純然たる超越存在の教義はデーズムと稱して差支ないであらう、然しテイーヅム(有神論)は、二極點を接続し又彼等が一方に偏して主張する理論をば結合して、吾人の道德的及び宗教的の経験を蹂躪せず否是を説明するものである語源學から云へば疑ひもなくデイズムとテイーヅムの二語は同意義であるが、用法に於ては異つて居るのである。テイーヅム(有神論)は普通に基督教の教義と區別すべき立論、又はそれに反對して居る立論を言ひ現はさんが爲に使はれて居るのである、斯の如き意味に於て使はれたる有神論の思想は、勿論基督教の神をば彼の活動を内在的の靈と認むる事なく、單に超越的存在とし、宇宙外の造物主として論ずるのである。さてデーズムなる言葉は十八世紀の初め、英國の或る一派が彼等の所謂「自然宗教」をば擁護

して、基督教の特別教義たる「默示教」と區別せんが爲に得たるものである、當時は哲學的思索とか、深き宗教的信念の増進した時代ではなかつた、然して正統派の牧師は自然宗教派の論ずる所に應答しては居つたが、神の世界に對する關係に於ては兩方共淺薄なる解釋であつたのである。當時の牧師が近代使はれて居る意味の「有神論」から甚しく遠ざかつて居た事は、彼等の反對黨と等しかつたのである。彼等が信じて居た獨斷説は宗教的経験を分解してそれより得たるものではなく、唯皮相的な天啓を基礎として得たるものであつた、故に彼等が神に對して懐ける不具的觀念を完全にせんとするには無力であつたのである、自然宗教は手短く云へば、基督教と言ふよりは寧ろ當時の一般的信仰個條であつたのである。

歴史上に於て純然たる神の超越存在は、基督教の生れたる猶太教に現はれて居る、然して基督教の中

心教養たる降誕の思想に對し、猛烈に反對して起つたるモハメット教には、一層明白に現はれて居るのである。ヘブリューの一神教はギリシャの自然崇拜の宗教たる美の宗教と對照して、莊嚴の宗教と呼ばれて居るが、實際莊嚴の點に於ては讚美歌や豫言の章、又はジョツプの書に言ひ現はされて居る或るものを凌駕することの出来るものはなからう。然しヘブリューの學者にとつては、自然界の莊嚴は嚴格に云へば神の現はれては無い、寧ろそれ等は神の御前に在つては、何等價值なきものであるとて、神力の無量無抵抗を言ひ現はさんが爲に使用されたのである、今一例を上げんに「神は地球上に座を占めて居る、然して地球上の住民はイナゴの如くである……視よ國民は大海の一滴にも比すべきものであり、大山の一沙として數ふべきである、視よ神は小島を易々と手に取り上げ、神の御聲は大木を折る、然り神はツバノンの大木を折りし、地球は神を見て震へり

小山は神の御前に於て蠅の如くに溶けたり」。一言を以て萬物を創造し又破壊する全知全能の神は、人の考へ及ばざる程高き天上に座し給ひて、東洋の専制君主の如き無責任と專横の意志を持つて居る……と云ふのが猶太人の神に對して考へて居つたる根本觀念である。「主の御聲に依つて天は造られし……神は言へり、然してそれはなされし……神命ずれば等は造られし」「我れ光明と暗黒を造る、我れは平和を造り禍を造る、主なる我れはこれ等のもの總てを成すのである……彼の造り主と争ふ人は禍なり、土器の破片は土を以て造られし土器と争はしめよ、粘土は自れを造りし人に向つて、何が汝を造りしやと問ふや否や」と。

猶太教の歴史は、上帝とか戰の神とか云ふ執念深い種族的元始的なる神の觀念を、ジエホバは彼の人々の指導者であり、保護者であるとしての國民の信仰を弱めることなしに、此高き一神教に精鍊したる

過程の記録である。然し未だ特別なる意味に於ては「天の神……全世界の神」は「イズラエルの神」であり彼の選民の教主である、然して此關係を實現せば全き超越存在の神が、其好果を充分現出する妨げとなるのである、と同時に、より高き神の觀念は單なる國家主義を脱して、ジエホバと彼の選民との連鎖は、正義柔順にあると考へらるるに至るのである。これが豫言的の教訓に依て深められ、精神的にさるゝ故其國民的關係は又神と彼の崇拜者との個人的關係ともなるのである、然してそれは讚美歌及び豫言章の中に最も親しき敬神の情操となつて現はれて居るのである、其中に於ては二者間の距離は殆んど取り去られて居る、即ち「主は心惱める人の所に在り」何故なれば、永遠に住める高き崇高なる神は……彼の名は聖靈であるが……かくの如く言へり、我れは高き聖所に住めり、されど又賤しき痛める心の人も共に住む」慈父が彼の小供を憐む如くに、主は自れ

を恐るゝ者を憐む」と、然して父たる憐愍の然も其慈悲が、神と人との無限の隔りを連結して居るものであり、それは、人の脆く果敢なき事を回顧してより生ずるのである、何故ならば彼は人間の組織體を知り、吾人が土である事を知れり、人は如何と言へば彼の生命は草の如く、野原の花の如く、一時榮へるに過ぎないものである、何故なれば一度風吹けば最早それは消へ去り、影も形も見へなくなつて了う。憐愍は戀愛に近いが、全く同じきものではない然して此父たる資格はセント、ジョンの云はれて居る子息の中に含まれて居るものとは遂に隔つて居るものである、「彼は神の子となるべき力を彼等に與へし」主は天より眺む……彼の住へる場所より彼は地球の住民總てを眺む」然して其言葉は具體化して吾人の間に留まれり、是等二つの格言は讚美歌の章と第四福音書とを分離する所の距離を計るものであり、それは神と人との教へに對して、猶太教と基督

教との相違である、宜なるかな舊譯聖書とセント、ジョン福音書の間には現はれたる「神と云ふ言葉」の變遷の過程を調べて見たならば、其の中には宗教發達史の全部が窺はれるのである。

其變遷を詳細に論ずる事は此章の目的でない故他日に譲る事とし、此所に於ては僞經典の中に示されたるヘブリエー人の神の概念に對する觀念及びアレキサンドリアのフィローに於て此觀念とロゴスに對する昔のギリシヤ思想の結合とを參考とするに止めよう。其時代に於ける哲學的研究は、プラトーンやアリストートル派の傳説を誇大ならしめたる故に、眞の超越存在即ち神は近づき難いものであり、又了解し難きものであると云ふ思想を益々強めて了ふた爲に其間隙を架橋すべき所の何か要素、即ち神と人との間に於ける何か仲間物の必要が焦眉の問題となつたのである。斯の如くにして吾人はフィローの第二の神即ちロゴス又は理性表明、一人息子或はブラ

トーン學派に於ける世界觀たる神の世界創造力、又は宗教學の言葉に於けるハイブリエスト……彼は其仲介を通じて神人間の關係を創造し之を保存する……の思想に到達するのである。然し内在神靈としてのロゴスは了解し得べきも、總ての敘述の及ばざる神自身は未だ不可解の儘となつて居るのである。宇宙に於ける神の永遠の默示が、基督に現はれたる神の特質及び神の人間に對する目的の歴史的默示と一致すると云ふ思想は、第二、三世紀の空想的基督教神學者の成せし仕事である、然してそれが第四世紀に至りアザシマスに依て教會の教義と決定されて了つたのである。其教義は熱烈なる論義中巧に仕上げられ、然して後の名に依て通つて居る所の信仰個條に連べられて居るが、それは不合理の極度であり又不明瞭なものである、之に反しアリアスの教義は比較的に明瞭であり信を置くに足るものである。然しアリアニズムは實際神を純然たる超越存在とし、近

づき難く又知らせる事の出来ぬものであるとの觀念に屬すべきものである、彼等が世界を創造する爲に存在して居ると云ふ半神半人のアリアン、クリストは神でもなければ人でもなく、神人間に存在して居る所の純然たる神話的存在者である。既に論ぜられし如くに、アリアスが神人間の仲介者として唱導する超自然者は、神人を結合せしめずして却て兩者を分離せしむる所のものである、何故なれば彼の所論は神人間に存する無限の越へ難き深淵を開發するの助となるに過ぎぬからである……斯の如き神學に従つての神人合一は不可能事である。又一方に於て吾人はアゼナシアンの立論が表白されて居る所の哲學的用語に對して、如何なる缺點を見出さうも、其立論はアレキサンドトリアンがストア哲學より受け繼いだる神靈……其神靈たるや唯一個の歴史的人物に束縛されたるものにあらず……の哲學的教義を、アザシマス彼自身が取つて以て基礎としたる廣大深

遠なるものである、何故なれば神は大體世界に宿り特には總ての人類に宿つて居るものである。故にアザシマスは時に「神が特に一人だけに神自身を表現すると言ふ觀念程道理に反するもの、又神に似合はしからぬものは何れも有り得ない」と論じて居る。

廣 告

監督市教員 山根日東館正著

日蓮主義百話

本書は著者が嘗て雜誌「統一」紙上に投稿連載せし『機微譯語』の果敢一〇〇題を改題せしもの今茲に聖誕十周年報恩の爲に之を上梓し初版は著者有縁の道俗に法施したり今回之を再版に附し實價を以て頒發す布教教材として修養資料として趣味津津たるもの儘も俗も競ふて購讀あれ宜切れぬ内に。

三五版三百七十頁
天金銀タロイノ類美本
定價金壹圓五拾錢
送料 金 六 錢

東京市淺草區北清島町十四番地

發賣所

統

一

團

振替東京一二一九番



住安慶自

何を頼むべきか

(大正十年十二月二日長崎市三菱造船所職工の爲に)

本 多 日 生

私の講題は「何を頼むべきか」と云ふのであります。私が頂いて居る日蓮上人が云はれた如く「一切の大事の中に國の亡ぶるは第一の大事なり」と云ふ聖訓があります。今の日本は大切な事柄、重要な問題と云ふのが澤山あります、然し國家が滅亡すると云ふ事柄から考へますと、後の問題は之よりも小さなものである。そして諸君は日本人なるが故に三千年の歴史によりて養はれたる大和魂を有つて居る、この大和魂には色々の長所があります、殊に國家の一大事になれば一遍に目を覺ますのである、

小さな事を振り捨て、國家の大事に力を併せて進む點に於て、日本人は世界中に秀で、居ると稱せられて居る、事なき時には少々居眠りをして居る、あくびをして居るが、然し一旦緩急あれば、國家の一大事と云ふ事がよく胸に響く時、國民悉く目を覺して愛國的精神に蘇る事が、日本人の特別に偉い點であります。故に私はこの諸君の愛國心に訴へて今日は御話をしたいと思ふのであります。

學者であるとか、政治家であるとか、實業家であるとか、労働者であるとか云ふのは小さな分け方である、お互ひ日本人であることは凡て同一であります、同じく國家の現状を觀察し、責任を持ち、力を併せて國家を護らねばならぬ所の國民であります

そこで今の日本は如何なる有様であるかと云ふことは、最早や諸君はお氣がつかれて居ることと思ふ。内には一國の宰相が暗殺されるし、一代の富豪を以て誇りし安田翁が殺されるし、そして爆彈の響きが東京驛の前に於ても、又大阪の富豪の邸前に於ても破裂したと云ふ事が今日の新聞に見えて居る、又九州の金持の妻君が男をこしらへて夫に離縁状をたさつて飛び出した、又畏れ多くも天皇陛下が長きに亘る御病氣で、遂に皇太子殿下が攝政になられた、色々と考へて参りますと國家の現状が並一通りでないといふ事が分る、或は天が日本人に一の警告を發して居るのはなからうか、餘りに氣誇り

心弛んで、フラ／＼とふざけて来たから、天が日本人に「氣を付けッ」と大きな聲で號令をかけて居るのではなからうか。外世界の大事を考へると歐州大戦の結果、歐米の問題は一段落を告げて、世界の勢力が大太平洋の問題に集つて来た、その大太平洋の中心が日本である、故に世界の國際的問題の花形は日本であります、茲て日本が大太平洋の問題に對し上手に働けば世界中の拍手喝采をうける事となるし、又下手に働けば世界中の笑をうける事となるのである。所が役者が少し病氣の氣味である、舞臺の上でひっくりかきつて斃れるかも知れないと云ふ有様に見える。抑も華府會議は何を問題として議しつゝあるか一は軍備の制限があり、他は太平洋のあらゆる問題である、そして軍備の制限にしても、太平洋の問題にしても、何れも相手にされて居るのは日本であり

ます。そしてこの會議が如何様に決定されるにしても、それは容易ならん問題がそこに起ると考えねばならぬ、既に今日迄におし寄せて居る世界の趨勢は日本に取つて決して良好と云ふ事が出来ない、見方に依つては國難の端を發して居ると云ふ事が出来る米國の勢力の趨く所にしても、英國の考へて居る所にしても、又支那人の態度でも、朝鮮人の態度でもロシア人の態度でも、凡て日本に取りて餘り利益ならぬ状態に於かれて居る、而も當の日本人はブラブラとして居るのである、以て日本の前途は容易でない事が分る、この際に日本の國民は如何にすべきかは誰しも考えねばならぬ事と思ふ、ウカリ／＼とその日を送つて居ると日本の前途は唯滅亡あるのみ、最早や亡國の嘆を抱く事を題として國民に警告せねばならぬではなからうか。

諸君、國家は如何なる力によりて保たれて居るのであるか。國家を支持する力は三つである、(一)國民の愛國的精神の力と、(二)經濟の上から國家を支持する力と、(三)武力を以て敵國を防衛する力との三つである、そして日本ではこの三つが如何になりつゝあるか。國民の精神の力は元々世界に秀てし忠君愛國の國民であつた、今も見様によりては立派な國民と云ふ事が出来る、然し實際の經驗に於て大和魂は腐りつゝありはしないか、或は西洋から來た、ある思想が這入つてより良くなるだらうと考へる者があるかも知れんが、そう云ふ事によりてこの國民の精神を作りかえる事は出来ないのである、今迄あつた良いものを捨て、新しいものを取り入れんとする時、元の良いものが消えて新しい良いものが這入らぬ、其間に空虚な時代が出来るのである、

丁度今の日本は昔の良いものが消えて新しい良いものが起らない空虚の時代となりつゝあると云ふ事が少々現れかけて居りはしなからうか、私はこの點に於て日本人の思想精神が餘程考へ物てありはしないかと思ふのである。

もう一つ經濟の事は如何と云ふに、元々我國は商工業の上には餘程遅れて居る、日本の産業は機械の發達に於ても、技術經驗に於ても、資本の點に於ても、職工の能率に於ても、あらゆる點に於て劣つて居るのである、少々金が出来た様であるが、まだ日本は貧乏な國家である、大分工場が澤山出來た様であるが、歐米諸國の工場と比べると驚くべき程劣つて居る、學問技術の上にもまだ及ばない點が多い、職工の能率も多少は進歩した様であるが、世界的に考へると未熟な所が多い。そこで

經濟的競争に於ても何によりて勝つことが出来るか材料の點に於ても、鐵もないし、綿もないし、毛もない、何もないのである、自分の食ふ米でさへも足りないのである、故に經濟的競争に於ては日本は敗北あるのみと云ふ事は誠に明白であります。現に之が現れて來かかつて居る事があらゆる點で明かである、戰時中起された澤山の工場にしても、殆んど全部が斃れてしまつたのである、どの會社が立派に成立つて居るか探すのに骨が折れる位である。又貿易の干係は如何と云ふに、毎月々々輸入超過計りて、正貨はドン／＼減じつゝある、故に景氣が恢復しないのである。そしてあらゆる製作品が日本のは外國のよりは高くて悪い、小さな物迄が今日はだめなのである。そこで日本には仕事がなくつた。否仕事はなんぼでもある。安くて良いものを作りさへすれ

はなんぼでも仕事はある、高くて悪いものを作る様
ては一週に仕事はなくなる。所が日本は高くて悪い
ものを作つて居るから段々仕事がなくなるのであ
る、而もそれが日本人は目が覺めなくてマダ／＼高
くて悪いものを作らうと考えて居るのが多いのであ
ります。故に經濟の上に於ても今日の狀態では敗北
は明白であり、連戦連敗、足腰立たぬ有様になりつ
ゝあるのである。

又武力の點は如何と云ふに、今や軍備制限問題が
起つて居るが、我國の武力は制限するにしても勝目
がないし、競争するとしても駄目である、どちらに
してもかなはないと云ふ狀態であります。何となれ
ば向ふは金もあるし、材料もあるしあらゆる點で競
争する事が出来ない。若し制限するとせば日本が都
合の悪い事になるのである、「ナゼ」と云ふに、それ

は例へば貧乏人の娘の嫁入りと、金持の娘の嫁入り
との如き關係に等しい、貧乏人の娘は嫁入仕度を整
へるのに、一時にどうする事も出来ない、長い前か
ら工夫をして、母が帯の一本、羽織の一枚を買いた
めて置く、何年もかゝりて仕度をして、或は珍やち
が特別の手當をもらつた時とか、或は質の流れの安
いものがあつた時とかに、色々タンセイをして漸く
嫁入りする事が出来るのである、所が金持のはそん
な工夫は入らない、イヨ／＼縁談がきまつてからで
も呉服屋に電話をかけて、何と何とを二週間に作
つて下さいと注文すれば、すぐ品物を自働車で届け
て来るのであります。軍備制限の結果は丁度同じ事
になると思ふ、大きな鋼鐵艦を作る造船所にしても
日本は横須賀と吳と川崎と三菱と四ヶ所しかない、
この外は大きな戦闘艦は出来ないのである、故に之

が夜を日についで艦を作るとしても、一の戦艦を作
るに約一年はかかる譯である、所が米國は如何であ
るかと云ふのに、澤山の造船所があり、十日位に一
隻作りうる勘定である、故に一年に三十六隻出来る
のである、日本は一年に一隻しか出来ない、とても
比較にならないのであります。又飛行機は無制限と
云ふ事であるが、三菱の飛行機製作所が名古屋にあ
ります、長い事かゝつて一つか二つ出来たに過ぎ
ない、一年に三十か五十位だらうと思ふ、所が向ふ
は一ヶ月に何千を作りうるのである、とても製造能
力が比較にならない。我國では軍備を縮小すると、
造船所もなくなくなるし、良い職工も仕事を變えてしま
ふ、サア戦争となつても、職工も無いし、造船所も
新に作らねばならない。故に日本政府は軍備縮小に
なつても又色々考えてあらうから、かゝる事は

起るまいと思ふが、兎に角軍備縮小は色々の干渉に
於て日本の爲によくない事が分るのである。又軍備
の競争をやるにしても、到底我國はアメリカに勝つ
事は出来ない。競争をやるにしても制限するにして
もどちらにしてもかなはない、どうにも困つた事が
出来た次第であります。然しそこで青息氣吐息氣を
ついて居るのは男子の態度でない。故に「何を頼むべ
きか」と云ふ問題が生じて来るのである。精神の力
を頼むべきか、富の力を頼むべきか、軍備の武力を
頼むべきか、今日の場合頼むべきものは一つもない
ぢやないかと云ふ結果になつて来るのであります。
そこで先祖傳來の大和魂が目覺す、「之は大抵の
事ぢやない、一つ考えねばならぬ」と云ふ事になり
て、初めて國家が救はるゝのであります。然らばど
うすればよきかと云ふに、精神の事柄については私

の考へてはやはり大和魂を呼び起し、之に磨きをかけるのが一番よいと思ふ、大和魂を捨て、デモクラ魂と取りかえて居ると、其の間に空虚な時代が出来、どうにもこうにもならないと思ふ、この精神の問題は一番大切な事でありませう。

経済の方面については、一通りは皆なが奮發をして能力を發揮し、及び無駄使ひをへらす事である、そこに経済の基礎が成立つと思ふ。無駄使ひをやめなければ物價は下らない、私は我國労働運動の最初の時代に、労働者が贅澤をするのをやかましく咎める説のあつたことを記憶して居る、所が労働者と云つても人間である、無論酒も飲むし、御馳走も食ふし、全く食べずに居れるものでないと云ふものがあつた、それもどうかと考へて居つた。然し物事は「皮引きや身が痛い」と云ふ譯けて、労働者の贅澤の結

果物價の騰貴と云ふことになつた、すると金が足りなくなる、酒が飲めない、御馳走が食べられなくなる、故に節約をせよと云はねばならぬことになるのである。ケチな様であるが、節約をすると甘い牡丹餅が食べられる事になる、直接牡丹餅を食はうとすると、牡丹餅が食べられない、食はずに我慢をして居ると澤山食へられる事になる、妙な次第であるが、之が大真理であります、この真理を諸君は考へねばならない。日本位物價の高い所はない、卵が一個八錢十錢と云ふ譯である、東京では大根が一本八錢十錢である、この邊では柿が一個イクラするか知らないが、東京名古屋神戸では十二錢十五錢して居る、柿三つ食ふと五十錢である、又ベッタラ漬が東京では一本五十錢、神戸では八十錢であります、それを職工が一本位ペロリと食つて居る、家内中で食ふと

一圓五十錢位もかゝる、實に高い、驚くべき物價が高くなつて居る譯であります。之は政治家の力でも下げる事は出来ない、大體國民が節約をする氣にならなければ物價は下らない。私の友人に大きな八百屋がある、八百屋ではありまするが、儲けた金で澤山の大学生を養つて居るのである、東京中の八百屋の中で一番偉いかも知れない、その八百屋の主人が笑ひ話に話して居るのに、同じネギでも之を幾つもに分類をして、十錢八錢六錢と云ふ札を出して置く實質に於ては同じである、すると一番高い十錢の分が先さへ賣れて行く、六錢の分でも十錢の方へ廻して置くと皆な買つて持つて行く、十錢が賣れ切れてしまふと六錢の札の分を十錢の所へ移すとの事である、柿にしても三錢五錢八錢十錢と札を出しておくと、十錢のが一番よく賣れる、すぐに賣り切れでし

まう、更に八錢の十錢の方へ移す、おかしな話であるが實際かゝる事が行はれて居るのである、柿一つが十二錢にもなると云ふ事は皆なが食ふからである、食はなければ十錢に下り、八錢に下り、六錢三錢に下るのである。故に三菱の諸君の如く多人數集つて居る所では、決心さへすればかゝる値段は如何様にも支配されようと思ふ、高い間は食はない、柿が十二錢すれば断じて食はないと決議をすれば、長崎の柿が一遍に半値に下つてしまふ、ネギが高いから一週間ネギを食はない、そばが高いから一同申合せてソバを食はないとなれば、八百屋もそば屋も青くなつてしまふのである。この事を國民全體で考へて消費を減らさない限りは、經濟問題は常態に歸らないのであります。皆ながノラクラして居つてそして餘計食はうとする間は物價は下らない、米にして

も我國に産する米は國民の需要に足りないのである。それを日本米の外は食はないと云ふ、故に一升五拾錢にもなるのである、そう高ければ米を食はない、ジャガ芋でも食つてあげと云ふ事になれば米は自然に下るのである。今後の生活は、商人は益々ずるくなる、それは商賣は世界的になるから、皆が生活費を節約する氣にならねば物價は下らない、物價が下らなければ賃銀を上げて何にもならない、賃銀を上げて會社を弱らせても、柿やそばやに取られては何にもならないじやないか、どうしても經濟の問題は「より多く働いてより少く消費する」と云ふ事を頭に打ち込まねばならない、「より少く働いてより多く賃銀を取つてより多く食はう」と考へて居る間はとてもいけない、この事を諸君がよく考へて節約をしないと、國家が立つか立たないかの問題がそこ

軍備の問題は如何であるか、若し縮少するとすれば、我國には金がない、そして愈々戦争が起るとすると、——戦争は起らない方がよろしい、然し太平洋の現状はいつ平和が破裂するか知れない有様である、華府會議にしても、日本が少々強く出れば破裂するかも知れない、云ふなりほうだいになつて居れば永久に頭が上らないことになる、今現に容易ならぬ所へ出會して居りはしないか、米國の云ひ分を聞かずに全權が旗を捲いて歸れば、向ふでは「そうか」と云ふ事になる、米國の云ひ分を聞けば頭が上らないことになる、大變な事になりつゝあるのである。この大切な點を補ふ力は何であるか、國民の努力、國民の愛國心である。何等かの力によりて此の點を補はねばならないが、その武力の足りない所は國民の精神の力を以て補ふより外はないのであり

に存するのであります。この間名古屋で、滞在して居た家の妻君が公設市場へ柿を買ひに行つた、三つ買つて、一つ拾貳錢づつて、參拾六錢拂つた、所が歸り途に家の近所の八百屋で見ると、同じ位のが三つて貳拾錢の札が出て居る、柿三つて拾六錢高かつた譯である、而もそれが公設市場に於て高かつたのである、日本ではそんな馬鹿なことをやつて居るのである、のんきとも何とも云ひ様がない國民であります。神戸では公設市場が澤山出来て居るが、市の商人は云つて居る、「公設市場が出来て、今迄ハキダメへ捨てた品物が一つも無駄がなく錢になる」と。かゝる次第でありますから、經濟の事は充分に精神の力を振り起し、能率を發揮せねばならない、日本を經濟上から救ふ道は之れ一つしかないのであります。

ます。そしてその爲には國民が皆な軍事的知識の教育をうけねばならない、軍備縮少問題を以て諸君を煽動せんとする者があるが、平和の風を下手にかつて、我國は軍備の力に於て米國に及ばないのみならず、國民全體が精神の平和病にかゝつてしまつたと云ふと、一朝戦が初まつて「ボン」と攻めて來れば、ギャフンと參つてしまつたのである。故に形の軍備は制限するにしても、無形の精神の軍備を張り切らねばならない、それが大切な問題であります。東西古今、人類の歴史を大觀すると、いつもかゝる事をくり返して居るのである、下手な平和を夢みた國がいつもやられて居る、戦は好きでないが、然し戦に對する氣力準備を持たないと國家は亡ぶるのである。そこで一つ根本の問題に歸らねばならない、日本には世界に冠絶せる大和魂がある、この大和魂を信ぜ

よ、この大和魂は不思議なものである、負けてはならない時は必ず負けない、弱つてはならない時には決して弱らない、この大和魂は神様の如きものである、不思議の力を現すものが大和魂である、唯強い丈でない、唯偉い丈でない、大和魂一度起れば如何なる事をもなし遂ぐるのである、先帝の御製に

如何ならん事にあひてもたはまぬは

我が敷島の大和魂

どんな困難面倒に出合しても、少しも閉口垂れず
に何のそのと進み行く力が大和魂である、

事しあらば火にも水にも入らばやと

思ふはやがて大和魂

いざ國家の一大事と云ふ事になれば、我も我もと國民が奮起して、火の中水の中も物かは、命を捨て、勇往邁進して、世界一品の大和魂が光輝を放つ。戦

となれば堅城に向つて突撃するのが大和魂である、旅順の要塞にしても、とても落ちないのを肉弾を以て突撃、突撃、又突撃、機關銃の下を突撃して遂に見事陥落せしめた。バルチック艦隊にしても敵が優勢であつたが、對島海戦に於て見事之を撃滅した、その一種云ふべからざる所に大和魂がある。昔は楠正成が八百人の軍隊を以て千早城に立て籠り、北條百萬の軍勢を相手に戦つた、百萬と八百とはどれだけ違つて居るか、九十九萬九千二百人である、然るに八百を以て百萬の大軍を破り、遂に北條を亡して建武中興の偉業を成し遂げたのである、そこが大和魂であります。又忠臣蔵にしても、吉良上野介が用心に用心をして、あらゆる點に於て之を打つ隙はなかつたのであるが、大石由良之介が酒に酔つて、目かくしをして一力樓上へ「由良サン待たいな」と痴

態を演じて居つて、遂に敵の間者を欺き、上野介の油断を見すまし、同士四十七人と共に吉良の邸に亂入して、仇上野介の頸を刎ねて、鎗の先に貫いて兩國橋を渡る時、そこに大和魂が輝いて居るのである。大和魂と云ふのは、困ることが出来てくると面白くなり、平々凡々であると居眠りをして居る、一旦緩急あれば大和魂が振り立つのが、我國の國民精神であります。そして今日は振ひ立つべき時が来たのである。

日蓮上人の事蹟を見ると、上人は大和魂の模範的人物である、北條氏が承久の亂に於て 陛下御三方を流し奉つた、後鳥羽院を隠岐へ、土御門院を佐渡へ、順徳院を土佐へ、そして二人の王子を但馬の山中へ幽閉し、公卿百官を東海道に斬つた、實に暴虐を極めたのである、然るに其の勢力に恐れて一人の

大義を説くものがなかつた、單り聖日蓮は身に寸鐵を帯びないが、出家沙門の身でありながら、北條義時は謀叛人なりと鎌倉街頭に叫んだ、爲に其の怒に觸れて龍の口に頸の座に据つたが頸が斬れなかつた、三百人の警固の兵者が取り廻して居る、皆なそれが二本づゝ刀を指して居るから都合六百本の刀だ、身に寸鐵を帯びない僧日蓮を、六百本の刀で斬らんとするのであるから切り損はない筈だ、それが切れなかつた、大刀取依智三郎が蛇胴丸の名劔を振り上げて日蓮の頸を斬らんとしたが、どうしても刀が下りない、居据みに合つてしまつた、マゴ／＼して居る内に月の様な光り物が江ノ島の方より飛び來り、雷電はためき、天地振動し、大刀取眼くらみ、倒れ伏し、残れる兵士は或は馬の上にならざるもあり或は大地にひれふすもあり、遂に僧日蓮が斬れな

つたのである。何故であるか。別段日蓮が大聲で怒鳴つた譯ではない、拳固をふりまわした譯ではない。静に合掌して南無妙法蓮華經と唱へて居つた。然るにどうしても頸が切れない、痛快云ふ計りなき次第である、あれが大和魂であります。加藤清正にしても毒を飲まされたが死なない、吉田松蔭先生でも徳川方の怒にふれて小塚原の形場の露と消えたが、立派な働きを残して居る。昔からえらい人は皆な大和魂によりて出来ない働きをして居るのであります。

そこでお互に力を合せ、經濟の問題にしても、思想の問題にしても、軍備の問題にしても、國民がほんとに決心さへすれば大日本帝國の前途は憂ふるに足りないのである。然し今日の有様では經濟問題に於ては能率が減退するし、思想の上には國民の精神が頹れるし、武力の上には愛國心が衰へて居る、こ

の状態で進んで行けば日本の前途は十年を出でないで亡國になつてしまふ、諸君の目の玉の黒い内に亡國の悲嘆を見、泣きの涙で暮さねばならない。然しこの十年をふんばつて、商賈でも、技術でも、戰爭にても、決して負けない所の愛國心を振り起し、サア來いと鉢巻をし、たすきをかけ、腕によりをかけた進み行くならば、日本の前途は春陽々であります。唯頼むは先祖以來傳へ來りし大和魂の一あるのみ、諸君の凡ての仕事の中、考の中に大和魂をより起して戴きたいと考へたのであります。(完)



記事

北の端より南の際へ

大正十年掉尾の大宣傳として、總裁現下の教の錫は北海道の札幌室蘭より、九州の長崎に及べり、左に梗概を録す。

十月五日國友監督布教師前編として東京を發す。夜宇都宮法華寺に於て講演、聴衆八十、「信仰の必要及要義」△六日午後會津若松妙法寺に於て講演、聴衆百三十、「信仰と感應」△七日夜福島縣二本松町蓮華寺に於て講演、聴衆八十、「人の心」△八日夜山形縣栗原本覺寺に於て講演、聴衆七十、「懺悔と信仰」△九日晝同縣中郡村小學校に於て村教育會主催民力演義講演會、「民力演義に就て」

十月十日盛岡市に於て總裁現下を迎ふ。同日晝法華寺に於て龍口法難會法要後講演、參詣者二百、「宗教の選擇及其必要」本多現下、「信仰の要義」國友文學士△同夜物産陳列館に於て市教育會主催思想問題

講演會、聴衆五百、「思想問題總論」本多現下、「慈悲報恩主義」國友文學士△同十一日青森縣八戸町小學校に於て大講演會、聴衆八百、「日本文化の正統」本多現下、「現代思潮と佛教」國友文學士△同日夜同町本壽寺に於て檀家加藤氏の寄進したる、小松原法難の記念靈材にて彫刻したる日蓮上人像の開眼供養を修し、終つて御會式法要を營む、參詣者堂に溢る、「罪福の觀念及信仰」本多現下、「信仰の要義」國友文學士△同十二日午後青森市赤十字社俱樂部に於て愛國婦人會主催講演會、聴衆三百、「婦人の正しき自覺」本多現下、「人生と信仰」國友文學士△同日夜同市公會堂に於て思想講演會、聴衆六百、「日本文明の正統」本多現下、「四恩の教」國友文學士△十三日午前青森驛鐵道從業員の爲に、聴衆二百、「修養の三方面」本多現下。△同日青森郵便局員の爲に、聴衆百五十、「修養の三方面」本多現下。△同日午後青森中學校に於て、聴衆五百、「思想の根本問題」本多現下。△同

日午後四時半青森を發し、津輕海峡を急行汽船にて札幌に向ふ。△十四日朝札幌に着す。新たに創立せられたる顯本寺檀信徒に迎へられ、自動車數臺を連れて顯本寺に着す、直ちに寺門與隆法輪常轉の祈りを御本尊の御前に捧げ、次で統一團支部秋季大會を開き、總裁猥下より「信仰の要義」に關し訓辭あり△同日午後一時より時計臺に於て道廳社會課主催民力涵養講演會、聽衆五百、「民力涵養の要旨」、本多猥下。△同日夜同所に於て日蓮主義講演會、聽衆三百。「日本文化の正統と日蓮主義」本多猥下。「慈悲報恩主義」國友文學士△同十五日午前巡查教習所に於て講演、聽衆三百、今村警察部長の開會の辭に次で、「思想の選擇と人格の修養」に關し本多猥下の講演あり△同日午後一時より札幌區立實科高等女學校に於て講演、聽衆九百、「女子の正しき自覺」本多猥下△同日夜札幌時計臺に於て日蓮主義講演會、聽衆五百「教育勸語と日蓮主義」本多猥下。「佛性に就て」國友文學士。同夜今村部長の官舎に客となる、夜更くる迄思想問題に關し清談盡さず△同十六日江別町小學に於て民力涵養講演會、聽衆一千名「民力涵養に就て」本多猥下。「修養に就て」國友文學士△次で同町法華寺に於て講演會、參詣者滿堂、「宗教の選擇と其必要」本多猥下。「殉教者を憶ふ」國友文學士。同夜同町岩田宅に於て講演、聽衆百五十、「修養の三方面」本多猥下△同十七日室蘭區日本製鋼所の客となる、同日午後一時より同所職員及家族の爲に講演、聽衆一百名、「日本文化の正統」本多猥下△同夜職工及家族の爲に講演、聽衆六百、「修養の三方面」本多猥下△十八日午前同所徒弟學校に於て講演、聽衆三百名、「修養の三方面」本多猥下。「修養の必要及其要義」國友文學士。同日午後一時同所職工の爲に、聽衆二千名、「日本文化の正統」本多猥下。同日夜輪西村に於ける製鋼所職工及家族の爲に講演、聽衆五百名、「思想の根本問題」本多猥下。港在中講演の餘暇

に製鋼所社員中熱心に日蓮主義を求むる者あり、朝早くより夜更くるまで宿舎に往訪の客絶へず。滞在兩三日にして信仰を更むる者數名あり、十九日午前豫想に數倍せる成績を收めて室蘭を發し、途次登別温泉に浴して連日の疲れを醫し、血潮の如き紅葉に心腸を養ひ、新しき勇氣と法悦に満ちて、同日午後歸途に就く。汽車に二晝夜を費し廿日朝日出度東京に着しぬ。

十一月廿九日夜神戸を發し、中國の山河を暗に飛んで西南長崎に向ふ、夜半汽車に故障あり、特急列車は目的地迄に六時間を延着して、三十日午後十一時漸やく長崎に着く、一日午前三菱造船所立神現圖場に於て、二千名、「精神の安定」。同日午後飽ノ浦船渠、二千、「何を頼むべきか」。二日午前立神現圖場に於て、二千五百名、「何を以て之に報ひん」。同日午後飽ノ浦工藝學校講堂に於て、一千五百名、「正しき信仰に來れ」。同日夜商業會議所に於て三菱造船所工場

委員及理事二百名の爲に、「思想の基準」。三日午前製鋼部に於て、一千五百名、「眞の解脱を求めよ」。同日午後飽ノ浦工藝學校講堂に於て、一千五百名、「世界第一の寶典」。同日夜中島會館に於て造船所社員職工家族及一般聽衆の爲に、一千五百名、「人の本性に復れ」なる國友文學士の前講の次に、「靜かに釋尊を思ふ」。四日午前商業會議所に於て造船所社員の爲に、「日蓮聖人に學べ」。以上本多猥下の講演あり△五日午後佐賀縣有田帝國窯業職工の爲に、「國運發展の元」本多猥下△同日夜久留米市商業會議所に於て天晴會主催講演會、聽衆八百、「日蓮聖人を慕ふ」本多猥下。「信仰の必要及要義」國友文學士△六日午前久留米市佐藤鐵絲工場に於て職工の爲に講演、「正しき自覺」本多猥下。「修養の必要」國友文學士△同日午後久留米市高等女學校に於て報徳會主催講演會、聽衆一千二百名、「何を頼むべきか」本多猥下。「人間性に就て」國友文學士△同日夜本泰寺に於て講演會、

聽衆堂に溢る、「法華經の大要」本多現下、「求むるよりは與へよ」國友文學士、右講演前天晴會所屬宣傳青年委員の爲に國友文學士より宣傳に關する經驗及覺悟に就て述ぶる所あり、大に士氣を鼓舞す。△八日午後下關市外彦島造船所に於て、聽衆一千名、「國運發展の元」本多現下。△同日門司鈴木伸銅所に於て、聽衆三百名、「日蓮聖人に學べ」本多現下。同夜下關を發し南國の九州より雪の越前に向ふ、九日午後福井着、市外二里の社村南居妙正寺に同夜日經上人三百遠忌法要後講演、聽衆五百名、「慈悲の源」本多現下、「日蓮上人の事跡」國友文學士△十日晝同寺に於て明治天皇十周年法要後講演、聽衆六百名、「王政復古と日蓮聖人」本多現下△同日夜福井市妙經寺に於て大講演會、聽衆五百名、「國史の成績と日蓮聖人」本多現下、「人の本性に歸れ」國友文學士。以上講演回数約五十回、聽衆約五萬、北の端より南の隅まで堅に長く日本を貫く、大正十年宣傳史の終りを

飾るに足るべく、又來るべき吾人の奮闘を暗示すべしか、南無妙法蓮華經。

統一閣月報

△十一月五日土曜講義「櫻時鈔講義」木村日保師「日蓮主義綱要」井村日成師、△六日講演「鎌倉に遊びて」古谷師「靈寶發現の時」高師「聖訓摘要」本多現下、△十二日土曜講義前同様、△十三日講演「自他綜合力とは何ぞ」鶴澤師「本佛道念の實感」栗田師「聖訓摘要」本多現下、△十九日土曜講義前同様、△廿日御會式並大講演會「米國を如何に見るか」宮岡中將「日蓮聖人を憶ふ」本多現下△廿六日土曜講義「日蓮主義綱要」井村日成師、△廿七日講演「佛教と人生」大川師「大慈大悲」高木師「道法の尊重」山根師。

千葉縣下聯合大法要

本宗千葉縣下寺院聯合の下に第七教區御門妙善寺に於て十一月十五日より十七日に至る二夜三日間音樂天堂大法會を嚴修し、十六日は特に管長親下の御親臨を請ひ、午後二時親下には大衆を隨へ皇運繁榮國運隆昌の大祈願を奉修し、慶賀文御親讀併て陸海軍戰死者の英靈及縣下罹信使祖先果代の各靈を吊慰し、終て御親教を垂れさせられ、次て木村監督師並に各布教師の講演あり、三千有餘の參拜者をして隨喜感泣せしめたり。□十五日「聯合の辭」土屋師「思想洗練の基調」栗原布教師「日蓮聖人の宗教」秋葉布教師「信仰と生活の功果」毛見無太郎氏「國民の自覺」高水日靖師「正義と活力」笹川雷正、△廿七日於大井町岡田道場「敬神崇祖の解釋」笹川雷正△十二月三日於湊谷公會堂「聯合の主旨」中川怡賢「國民思想の歸趨」笹川雷正。巡回教化部に於ては、「教育勸諭と思想問題」を國民道徳振興の資料として文書簿道をなし、多大の好果を収めたりと。

活」成島布教師「混亂の巻に立ちて」武田布教師。□十六日「正しき信仰」本多現下「根深ければ枝茂し」木村監督布教師「經卷相承」德布教師「法國冥合」渡邊布教師「思想問題の史的觀」齋藤布教師「心」小島師「立正安國」栗原布教師「美善の徳」鈴木師「正義」松永師「信とは何ぞや」中島師。□十七日「思想問題に就て」伊藤師「體曲れば影斜なり」伊藤師「信仰の力」德布教師「利生の要素」小竹師「異體同心」大橋日鏡師。

各地の思想戰

◎千葉縣下 十一月八日於鏡子小學校「聯合」時友太助「信仰と生活」成島師「國力培養と國民精神」本多現下、聽衆四百餘名、△九日於東金公會堂「聯合」成島支部長「七法に就て」加瀬少將「刺下の要求と日蓮主義」本多現下、四百餘名、△十月廿九日於蓮沼小學校「聯合」軍人分會長「修養の第一義」成島師「文化生活の私見」武田文學士「社會思想と佛教」加瀬少將、四百餘名、△十三日於東金公會堂「如說修行鈔講義」山岡雷正「日蓮聖人の理想」成島師。△於水崎正國寺「聯合」北田師「日蓮主義の要諦」成島師。△於丹尾東成寺「聯合」高貫師、金坂師、成島師講演。△十一月九日於常覺寺「迫るべき道」△十一月十四日於東照寺「正しき信仰」△十二日於同寺「偉大なる信とは何ぞや」△十四日於水崎妙國寺「思想問題」△十五日於御門妙善寺「信とは何ぞや」△十六日同所同題。△廿三日於常覺寺「異體同心」以上中島元道師講演。

◎京都通信 十月一日於本山「社會問題の歸趨と法華經」有田師、同日健兒會、△二日「法蓮鈔」萩原師、同日於格家「現代思想と日蓮主義」金光師、△六日於講堂健兒會、△八日於成誠院「慈悲」有田師、同日於二樂會「平和より戰へ」山口師「四法成就」萩原師、△九日於鐘紡壹千名「佛教の人生觀」萩原師、△十日「誠の道」土持師、△同日於木正婦人會「婦人の長所短所」金光師、△十一月於大慈院宗祖御會式「御會へ御報恩に就て」土持師、同日健兒會、△十二日於本山宗祖御會式連夜大法要後說教、△十三日於本山御會式「道念」萩原師、△十六日健兒會秋季旅行、△十八日於本山大講演「願

關より後へ「土持師」日蓮主義より觀たる女性の位置」金光師「日蓮主義と博愛慈善」萩原師、△廿一日健兒會、△廿三日、本多總裁祝下導師の下に團員各員先祖代々の大法要嚴修後、團員各位の自覺」本多祝下、△廿四日於講堂「經書要文講義」本多祝下、△廿六日健兒會、△十二月八日於二樂會「聖祖門下としての吾等が使命」土持師「日蓮主義と時事問題」金光師「日蓮上人學生の主張」松本堅晴師、△十八日於本山講堂「只涙あるのみ」土持師「上行菩薩の自覺」有田師「心に明鏡を用ひよ」金光師「人類共同生活上の責務」萩原師、△廿七日於本山講堂「經書要文講義」本多祝下。

◎大阪教況 十月三日於和井田宅「正しき信仰」上田師、同日夜於蓮成寺「久遠の靈光」京藤師「日蓮門下の明鏡」上田師、△九日於山本宅「土籠御書」上田師、△十三日「久遠の背景」松本師「日蓮主義の得益觀」京藤師「種々御授舞鈔」上田師、△十五日於野坂宅京藤師講演、△廿三日於蓮成寺「如來と共に」松本師「佛陀觀の正統」山口師「日蓮主義と婦人問題」京藤師「餘經も法華經も證なし」上田師、△廿五日於豐田紡織六百名「大和魂の愛護」本多祝下、△同日夜於大紙俱樂部「日蓮主義綱要」本多祝下、△十二日於蓮成寺御會式連夜、京藤師土持師説教、△十三日御會式、土持、上田師説教、△廿五日「日蓮主義綱要」本多祝下。

◎豐橋通信 十月九日少年會、△十二日御會式「日蓮聖人の感激」松本堅晴師、△十三日「日蓮上人の主張」加藤少將、十一月二日思想問題大講演「開會の辭」加藤少將「國力培養と眞の自覺」本多祝下、△十三日少年會、△十三日於三川町思想問題講演、野澤少將加藤少將講演、△二日於福島、野澤少將出演、△三日於法恩寺思想問題

大講演「生活の意義」小林文學士「思想問題私見」本多祝下、△同日夜於玄妙寺「信仰的生活」小林文學士「法華經大觀」本多祝下。△十一月二日於妙立寺「眞に萬物の靈長たれ」岡本山主「惡魔は死れつゝあり」加藤少將「眞に國家擁護之民となれ」岡本山主「衆靈御入滅に當り今肯惑」加藤少將、△十二日「兒童朝拜會に對する感想」加藤少將「惡魔の念を以て退」岡本山主。

◎久留米教報 十一月二日於平岡宅「開法の功徳」平岡師「婦人の自覺」中原師、△五日於本泰寺「正しき路」中原師、△同日天晴會「善惡の標準」南島氏「天分を知れ」山藤氏「原首相を憶ふ」中原法學士「法華經要義」中原師、△十二日於本泰寺「善惡品の精要」出海師、△同日夜「余の信仰」平岡師「善惡品の精要」出海師「信心の力」吉見師「聖祖の徳を慕ひて」中原師、△十六日地明會「鐵壁に就て」古市金子「簡易食糧の一製法」國武のぶ子「修養訓話」平岡師「世界の趨勢と婦人の自覺」中原法學士、△十六日於妙經寺報恩に就て「吉見師「聖祖の徳を慕ひて」中原師、△十九日於天晴會「暗夜の燈」永田氏「努力としての努力」平木氏「人生と信仰の眞値」中村氏「青年の思考」山藤氏「信仰の本義」南島氏「思想と信仰」中原氏、△廿三日於本山宅「すべて善意に解せよ」萩尾とく子「家庭信仰の基準」中原師。

◎津山通信 十一月十二日於上野教會所「日蓮聖人正傳」能仁一十師、△廿日於津山公會堂御講義二千名「ごあいさつ」能仁一十師「花ちゃん和金ちゃん」町田事光氏「成功した木助さん」吉川正吉氏、△廿日於本蓮寺御會式「信仰」町田師「日蓮主義者の覺悟」北島彌作氏、△廿二日於教會所「死生の問題と信仰」能仁一十師。

新年の御慶

芽出度申納候

本多日生

謹賀新年

總本山妙滿寺

恭賀新年

顯本法華宗宗務廳

山岡日紹
笹川日堂
國友日斌

木村日保
武田顯龍
大森日榮

謹賀新年

統一團

謹賀新年

顯本法華宗評議員

鈴木日雄
關田日城
森川日修
堂亮雄
横山會章

謹賀新年

統一團名古屋支部

同 四日市分團
同 豐橋分團
同 一宮分會
同 枇杷島分會
同 南郊分會

賀正

統合宗學林

謹賀新年

統一團大阪支部

統一團神戸支部

熊井本光

外團員一同

謹賀新年

統一團京都支部

謹賀新年

統一團札幌支部

謹賀新年

統一團新舞鶴支部

恭賀新年

統一團社會部

うごくてら同人

恭賀新年

自慶會

賀正

財團
法人名古屋自慶會

賀正

自慶會京都支部

謹賀新年

自慶會大阪支部

謹賀新年

自慶會神戸支部

謹賀新年

自慶會明石支部

謹賀新年

統一編輯局

國友日斌

長谷川義一

川島常照

廣瀬潤平

小林順雄

松尾清明

兒玉常宣

品川町
竹下龜太郎

千葉縣山武郡岳村清通寺住職
山田誠心

千葉縣山武郡岳村東成寺住職
高貫見龍

千葉縣山武郡岳村興善寺住職
都築信寛

千葉縣山武郡源村聖王寺住職
齋藤日章

千葉縣山武郡日向村蓮華寺住職
平賀龍惠

千葉縣長生郡豐田村廣慶寺(病中欠禮)
池澤快整

千葉縣山武郡東金町妙徳寺
武田顯龍

千葉縣山武郡大和村本福寺
堂亮雄

千葉縣山武郡東金町西福寺
山岡日紹

千葉縣山武郡土氣本郷町善壽寺
溝口會旭

千葉縣山武郡土氣本郷町水壽寺中
手代木常整

千葉縣山武郡大椎長興寺住職
米倉義明

謹賀新年

東京市外品川町妙靈寺住職

笹川日堂

東京市外品川町本光寺住職

今成日督

東京市外品川町清光院住職

伊保内教精

東京市外品川町本榮寺住職

高木日靖

東京市外品川町眞了院住職

大森日榮

東京市外品川町妙國寺中

木内照純

東京市外入新井町善慶寺住職

石波英哉

東京市外品川町蓮華寺住職

松田宏榮

第一布教團

東京市小石川區雜司ヶ谷本教寺住職

井村日威

東京市小石川區雜司ヶ谷本教寺住職

田島義潤

東京市本郷區駒込蓮華町顯木寺住職

池澤日辰

東京市牛込區原町常樂寺住職

山根日東

東京市牛込區原町常福寺副住職

石川顯隆

東京市牛込區早稲田南町正法寺住職

木村日保

東京市四谷區南古町法恩寺住職

秋山乾英

東京市赤坂區一ツ木町常其寺住職

森川日修

東京市淺草區眞野町常福寺住職

鈴木日雄

東京市淺草區眞野町常福寺住職

金坂義昌

東京市淺草區南松山町法成寺住職

森川泰修

東京市淺草區永住町妙經寺住職

關田日城

東京市下谷區谷中初音町本授寺住職

野口日主

東京市下谷區上根岸町顯木教會

笠原琢瑞

東京市下谷區上根岸町顯木教會

柳生正生

(一號)品川
正法護持會

千葉縣山武郡豐海村善立寺住職 鈴木正二
 千葉縣山武郡豐海村善福寺住職 花澤暉泰
 千葉縣山武郡豐海村淨泰寺住職 廣部乾山
 千葉縣山武郡豐成村蓮成寺住職 詩田圓壽
 千葉縣山武郡豐成村妙木寺住職 鶴澤暉温
 千葉縣山武郡豐成村常覺寺住職 伊藤寬隆
 千葉縣山武郡豐成村妙覺寺住職 中島元道
 千葉縣山武郡豐成村妙善寺住職 大橋日襲
 千葉縣山武郡福岡村飯島寺住職 小竹俊雄
 千葉縣山武郡福岡村東榮寺住職 鈴木乾泰
 千葉縣山武郡大和村法光寺住職 成島日衛
 千葉縣山武郡片貝村本誓寺住職 土屋真容

千葉縣山武郡土氣本郡町寶藏寺住職 內田尊學
 千葉縣山武郡山邊村法輪寺住職 大原常玄
 千葉縣山武郡山邊村法光寺住職 渡邊善儀
 千葉縣長生郡本納町法福寺住職 山形真瑞
 千葉縣長生郡豐田村大善寺住職 井口善叔
 千葉縣長生郡豐岡村本大寺住職 宮川日佑
 千葉縣長生郡本納町妙嚴寺住職 北田知一
 千葉縣長生郡本納町豐教寺住職 鈴木存懷
 千葉縣長生郡新治村万光寺住職 富田貞叔
 千葉縣長生郡顯村本法寺住職 渡邊日命
 千葉縣長生郡二宮本納村本源寺住職 小島洗明
 千葉縣長生郡新治村淨立寺住職 秋葉日敬
 千葉縣長生郡野崎村其妙寺住職 矢田智光

千葉縣千葉郡譽田村常興寺住職 松本真釋
 千葉縣印旛郡八街村新福寺住職 因幡善英
 千葉縣印旛郡尾村松深寺住職 西郡睿瑞
 千葉縣市原郡内田村本傳寺(喪中欠禮) 栗原顯有
 千葉縣市原郡西村泰海寺 秋葉日虔
 千葉縣市原郡菊間村行光寺 橫山會章
 千葉縣市原郡東村行福寺 小池耕碩
 千葉縣市原郡通津村奉行寺住職 梅澤天純
 千葉縣市原郡市東村本宮寺住職 西村會立
 千葉縣印旛郡酒々井町經風寺住職 前田日應
 千葉縣君津郡本更津町成教寺住職 飛山日甫
 千葉縣君津郡佐貫町安樂寺住職 齋藤見玉
 千葉縣君津郡馬來田村本立寺住職 德會

千葉縣長生郡東郷村蓮成寺住職 齋藤自正
 千葉縣長生郡新治村光明寺住職 久松光道
 千葉縣千葉郡生實濱野村泉福寺住職 荒川智會
 千葉縣山武郡成東町木田寺住職 堀江誠一
 千葉縣原郡松野村妙松寺住職 大津日文
 千葉縣小田原町妙經寺住職 三橋會要
 青森縣八戸郡本誓寺住職 中田量叔
 京都市高辻東洞院西入妙祐久遠寺住職 坪永日監
 福島縣若松市甲賀町妙法寺住職 竹内無着
 高田市増屋町顯木寺住職 矢野聖顯
 岡山縣岡田郡飯岡村本經寺住職 三須教英
 岡山縣赤磐郡岡原村久成寺住職 吉塚通榮
 岡山縣赤磐郡岡原村久成寺內 塚越通曉

福岡縣小倉野崎兵衛十二郎一孝志願兵 吉塚通暎
 東京府下小笠原父島法蓮寺 木谷常榮
 靜岡縣見付町其妙寺住職 山本通辨
 神奈川縣神奈川在大豆戸本乘寺住職 前田圓整
 愛知縣瀨尾郡田原町當行寺住職 野中通玄
 明石市大屋谷圓成寺住職 川崎英照
 岡山縣和氣町本成寺住職 原田日勇
 姫路市五軒町妙立寺住職 中川日史
 鳥取市立川町法泉寺住職 桔梗開章
 東京府下三河島町信行會 泉谷明光
 台中市國本法華宗布教所 主任 松鶴妙明

臺中 松鶴妙明
 外 園員一同
 軍機處員 井上清純
 大阪府南區上三宮町五三二五 友廣善夫
 岡山市弓之町 池上文太郎
 鳥取市吉方町鳥取本化聖教團常任幹事 中島孝治
 東京市牛込區市ヶ谷甲良町十二 川奈銳作
 東京市牛込區藥王寺前町七〇 川村善助
 東京市淺草區西島越町 齋藤リエ
 千葉縣市原郡妙ヶ崎町妙經寺住職 松井道安
 千葉縣市原郡妙ヶ崎町當教坊住職 山下純秀
 千葉縣千葉郡基町長龍寺住職 齋藤立靜
 東京市小石川區原町本念寺住職 大須賀玄遊
 東京市下谷區七軒町妙顯寺住職 長谷川義一

賀正
 統一關臺灣支部

千葉縣長生郡長柄村妙興寺住職 山本賢乘
 靜岡縣田方郡三島町本妙寺住職 森川秀光
 靜岡縣田方郡南田村妙高寺住職 木下圓通
 豐橋市清水町妙興寺住職 松本堅晴
 北海道札幌郡江別町法華寺住職 田久保日城
 北海道札幌區白石町願本寺内 本澤隆正
 神戶隨穩 木原文靜
 四日市市沖ノ島安樂寺 神戶隨穩
 長谷川義一
 山路元吉
 兒玉小治郎
 池上常次郎
 佐藤りう
 服部たか
 大坂府三島郡三島村法華寺住職 葦名玄鏡

福井市相生町妙經寺 石井寛俊
 三州刈谷町長遠寺 武藤照惠
 金澤市六斗林本覺寺 窪田純榮
 遠州吉美妙立寺 岡本圓正
 同 正住坊 猪野貞立
 同 養仙坊 増田智靜
 同 正覺坊 藤本智宏
 盛岡市加賀野六六 中村謙藏
 久留米寺町 久留米天晴會
 同 本壽寺 中原通應
 伯耆松崎本立寺 富田日進
 廣島市新川橋町本照寺 島田日關
 千葉縣山武郡大網町本國寺 土屋賢生

千葉縣長生郡長柄村 第三教區青年布教團
 京都總本山妙滿寺 萩原日道
 會長 有田宏道
 副會長 土持良達
 同 阪本健兒會
 青森地明會幹事 柏木吾市
 湯山貞吉
 鈴木新三
 阿部秀三
 京都府妙新久遠寺 坪永日監
 安井眞教
 熊井乾堂
 清水純榮
 土持良達
 有田宏道
 金光孝碩

本多日生祝下著書一覽

- 法華經の心髓 金壹圓六拾錢
- 日蓮主義初歩 金七拾錢
- 日蓮主義 金壹圓五拾錢
- 修養と日蓮主義 金壹圓五拾錢
- 國民道德と日蓮主義 金壹圓五拾錢
- 日蓮聖人正傳 金貳圓貳拾錢
- 日蓮主義綱要 金貳圓貳拾錢
- 日蓮聖人の感激 金貳圓貳拾錢
- 日蓮主義の運用 金貳圓五拾錢
- 東洋文明の權威 金貳圓貳拾錢
- 國民教化 金貳圓貳拾錢
- 法華の伴 金貳圓貳拾錢
- 戰士の伴侶 金貳圓貳拾錢
- 思想問題の歸結と法華經 金貳圓
- 聖訓要義 各卷壹圓貳圓貳拾錢
- 開目抄詳解 上卷一部金貳圓八拾錢
- 聖語錄 金貳圓八拾錢
- 優婆塞戒經通解 金八拾五錢
- 大乘本生心地觀經通解 金八拾五錢
- 法華經講義 上卷下卷各一部金壹圓四拾錢 送料一部金拾八錢

○大藏經要義 一部金壹圓八拾錢十一卷迄既刊
 ○法華經要文 送料一部金十八錢半年前金送料不要
 ○佛教信仰の正統 上製金五拾錢 送料一部金貳錢

以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし
 東京市外品川町妙國寺内
大藏經要義刊行會
 振替東京三一五九六番

一冊	金壹拾錢	送料一錢
一ヶ年	金參圓參拾錢	送料共

大正十一年十二月廿七日印刷納本 (第三百二十四號)
 大正十一年一月一日發行
 發行所 編輯所 印刷所
 東京市神田區美土代町二丁目一番地
 東京市神田區區本町三丁目一番地
 東京市神田區區本町三丁目一番地
 名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常徳寺内

日蓮宗河合大僧正題字 日蓮宗風間權大僧正題字 日蓮宗北尾日大先生編著

聖誕七百
紀念出版

日蓮宗法要式

紫羽二重 七百頁
金文字入 七拾錢
正價金參圓五拾錢
十一月十日 特價金參圓十二錢

日蓮宗日蓮主義の實踐的方面に於ては信仰を根本とす。而して信仰の要は朝夕の勤行及び月次年次等の法要儀式を勤行するを以て第一とす。然るに古來完全なる法要信仰の書無し、著者之を慨すること十年、苦心研鑽の結果本書を著して此缺陷を補はんとす。第一篇常時法式には日課、週次、月次、年中の諸式を掲げ、第二篇特種法式には禮法華會、施飯鬼會、放生會、祈禱經、改宗式、得度式、晋山式、結婚式、葬儀等の諸式を示し、第三篇諸回向文には四十餘種を列ね、第四篇法華要品には二十品を載せ、第五篇信行要文には經前經後、唱前唱後六十餘文を選び、第六篇聖讚歌には一般讚仰歌及びコドモ會諸歌を集め、第七篇雜部には諷誦、歎徳、奉告、祝辭、帛祭文、七十餘例を挙げ、且つ附するに改名字選を以てす。凡そ本化信行法式の各方面を網羅収録して遺憾あることなし。願くば五千の住職者諸師、二百萬の信徒諸氏、五百の學生諸君乃至一般日蓮主義讚仰者諸彦、奮て一本を座右に備へられ、以て信仰の正軌、法式の指針に充てられんことを。

五大特色

- 一、本化組織宗學の見地よりして諸種の法要儀式を最善に分類し整理し且つ統一あらしめたる點。
- 二、法要信行に必要な法華要品圖書要文を編入して如何なる法式にも此一冊にて事足る様至極便利に編輯したる點。
- 三、年中行事三十八種特種法式三十餘種等の下一々に適當なる御書を選抜配合して日蓮主義を法式上に發揮したる點。
- 四、日課月次年次等の重要法式を一々具體的に羅列し以て費用に適切ならしめたる點。
- 五、率正的方面の新式も實行に適し傳統的方面の古式も亦非宗義ならざる機轉に注意を拂ひたる點。

發行所

京都市東洞院三條上ル
振替大阪一三〇六五番

平樂寺書店

目次

日蓮聖人を慕ふ……………	本多日生
本經祖書要文講義……………	本多日生
佛教と政道……………	本多日生
法華三聖に對する感想……………	井上哲次郎
世界的精神文明の寶庫……………	中村又衛
記事報道十數件……………	

第廿六年二月號

統一

